

『日本アジア研究』第9号 (2012年3月)

『警世通言』 版本新考

大塚秀高*

『警世通言』の原刻本は夙に伝を失している。これまで最古の刊本とされてきた「兼善堂本」は、原刻後印本の本文を重刻し、図像は画工の署名を含め模刻したものである。早稲田本は「兼善堂本」の版木に埋木改刻を施した後修本、衍慶堂本（『二刻増補警世通言』及び24巻本）はこの版木を再度埋木改刻したものである。原刻本第40巻「旌陽宮鉄樹鎮妖」は明末崇禎年間以降に『三教偶拈』に流用され、「許真君旗(旌)陽宮斬蛟伝」となった。「旌陽宮鉄樹鎮妖」に替わって新刻された「葉法師符石鎮妖」が『警世通言』に加わり、新たな『警世通言』が出版された。これが佐伯文庫本である。なおその際、図像は原刻本により模刻された。三桂堂本は佐伯文庫本の本文に依拠しつつ、収録作品を調整し、眉批を省いた本文を簡筆字で新刻し、図像を一部修正したものである。

キーワード：警世通言、原刻本、兼善堂、衍慶堂、三桂堂、三教偶拈

まえがき

筆者はかつて「警世通言の版本について—佐伯文庫本と都立中央図書館本を中心に—」¹ならびに「警世通言の版本について(補)」²の二論文を著し、『警世通言』の版本について考察した。後に執筆を担当した「警世通言四十巻四十篇」³においてもそこで述べた説によった。ところがその後早稲田大学にこれまで知られていなかった版本が蔵されていることが伴俊典によって報告された⁴。加えて筆者の担当により『警世通言』の校訂本が上海古籍出版社から刊行されることになり、その底本について検討する必要に迫られることになった。本論は以上の状況を踏まえ、『警世通言』の版本について新たに検討したものである。

*おおつか・ひでたか、埼玉大学教養学部教授、中国俗文学

¹『中国—社会と文化』第1号所収、1986年6月。

²『中国古典小説研究動態』創刊号所収、1987年10月。この論文は、註1の拙論が先行業績である胡万川の「馮夢龍所編話本小説「三言」的版本与流传」（『中華文化復興月刊』9-6所収、1977年6月）ならびに「關於三桂堂本警世通言第四十巻」（『中国古典小説研究専集』5所収、1982年11月）を見落としていたこと、拙論執筆時に未見であった台湾の中央図書館蔵三桂堂40巻本を後日調査したことなどを踏まえ、再度『警世通言』の版本について論じたものである。なお両者は合わせて「關於《警世通言》的版本—以佐伯文庫本和都立中央図書館本為中心—」の題で黄霖氏に中訳されている（『明清小説研究』1989-1所収）。

³『中国古代小説綜目』（山西教育出版社、2004年9月）。

⁴「早稲田大学図書館蔵『警世通言』について」、『中国文学研究』第33期所収、2007年12月。

一 兼善堂本『警世通言』について

これまで、兼善堂本が『警世通言』の最良かつ最古の版本とされ、もっぱら影印本が出版されてきた。そこで本論も兼善堂本の検討から始めることにしたい。

兼善堂本としては、名古屋市立蓬左文庫本と東京大学東洋文化研究所倉石文庫本の二本が現存する。倉石文庫本は蓬左文庫本に存する「金陵兼善堂謹識」の文字を有する封面を欠くが、長沢規矩也⁵、李田意⁶などの先学の考察により、両者は同版本（すなわち兼善堂本）であり、いずれも初印本ではないが、倉石文庫本が蓬左文庫本に比し早印とされてきた。筆者もこの結論に異論はない（以下で「兼善堂本」という場合、特別に断らない限りこの二本をさす）。

以下に本論の論旨に関わる両者の相違を記しておく。倉石文庫本は第1冊の巻頭に置かれる挿図の第17葉を除き落丁がない。対する蓬左文庫本は本文第12巻の第3葉、第22巻の第5葉、第6葉、第37巻の第1葉、第2葉、第40巻の第74葉の総計6葉を欠く。また版心の巻数表記を同じく「卷三十四」とする「況太守断死孩児」と「王嬌鸞百年長恨」の間に乱丁がある。すなわち第3葉から第6葉と第13葉、第14葉が相互に入れ違っているのである。加えて版木の傷みなどの状況により、倉石文庫本が蓬左文庫本に比しより初印本に近いが、「目次・本文・版心の巻数がお互いに一致せず、版心の巻数亦時に文字に落つきを缺」き、「巻数亦後來刪改の痕見え、概して匡郭も未だ完しとはいいがた」として、倉石文庫本も「原刻初印本とは認めがた」とされている（長沢）。筆者は以上について是認したうえで以下の諸点を指摘し、新たな観点を提供することにした。

多くの場合、版木一枚には連続する二葉分が同一の刻工により両面に彫られる。よって二葉連続して本文が欠けている第22巻の第5葉、第6葉、第37巻の第1葉、第2葉の場合、何らかの理由により対応する版木一枚、合わせて2枚が失われていた可能性が高いといえる。これに対し、第12巻の第3葉、第40巻の第74葉の場合は、装丁ないし印刷時のミスにより落丁となった可能性が高かろう。ちなみに倉石文庫本で欠けている挿図第17葉だが、蓬左文庫本には存在しているから、これについても落丁とみなせる。蓬左文庫本の、本文の版心巻数表記を同じく「卷三十四」とする「況太守断死孩児」と「王嬌鸞百年長恨」の間における乱丁も、発生した葉数が第3葉、第4葉、第5葉、第6葉ならびに第13葉、第14葉となっているから、版木3枚分が入れ替わっていたことに気づかず、そのまま印刷、装丁してしまった結果とみなせる。『警世通言』を構成する各篇の巻数は、本文においては巻頭、版心、巻末の三箇所に示される。前二者はすべての巻にみえるが、巻末のそれは倉石文庫本、蓬左文庫本のいずれにあっても一部を欠いている。巻末に巻数表記が見える巻の数は蓬左文庫本に比し倉石文庫本の方が多く、蓬左文庫本だけに見える例はない。この点も倉石文庫本を蓬左文庫本より早期の印本とする

⁵『長沢規矩也著作集第五巻 シナ戯曲小説の研究』（汲古書院、1985年2月）所収の「「三言」「二拍」について」、「三言」書名板本続考」、とりわけ後者を参照されたい。なお以後の長沢規矩也からの引用はこれによる。

⁶『日本所見中国短篇小説略記』（『清華学報』復刊1・2所収）を参照されたい。なお以後の李田意からの引用はこれによる。

先学の結論を支持する。

先学による指摘はないものの、兼善堂本は意外と誤刻の多い刻本である。たとえば淫と瑤、標と標といった誤り易いヘンの誤刻、木と本、人と入と八、問と間と開、塵と塵、科と料、白と自、土と士、己と巳などの類似する字の誤刻（このなかには後印本であることによる印面の悪化に由来するものも存在しよう）が頻出する。こうした誤刻の原因のすべてを現存する兼善堂本がいずれも原刻初印本ではないことに帰せられるか、言い換えるなら、兼善堂本の原刻初印本ではその多くが正しく刻されていたとみてよいかは疑問である。なぜなら、兼善堂本にみえる誤刻のほとんどが、後述する、これまで兼善堂本より後に刊行されたとされる刻本では正しく刻されているからである。しからばそうした刻本のいずれかに、それが兼善堂原刻本である可能性、ないしは兼善堂原刻本により忠実な刻本である可能性はないのか。以下ではこの問題をめぐって検討を進めてゆくことになるのだが、それには先立って『警世通言』の主要な版本を紹介しておく必要がある。

なお現存する兼善堂本は一見字様の異なる複数種類の葉で構成されている。これらは兼善堂本が先行する複数の版本を補配してなった、あるいは兼善堂による補配があったことを示唆するかに見える。しかし筆者はそのようには考えていない。小説に限らず、木版本の版本を作成するにあたっては版下が必要である。版下は、それが新たな著作なら著作者（ないし編集者）の最終原稿により、旧作なら編集者や書肆の老板が指示した原稿により、専門の筆工によって作成されたと思しい（最終原稿ないしその複本が直接版下に使われる場合もあったろう）。最終原稿やその複本なら浄書されていたろうし、著作者自らも版下の校正に当たったろうから、誤字、したがって誤刻は稀だったはずである。だが兼善堂本『警世通言』の版下の場合はそうではなかったようだ。編集者または書肆の老板が指示した原稿（既成のおそらくはかなりの後印本）がいきなり刻工に渡されたと思しく、時には一篇の作品を複数の刻工が（偶数の倍数葉ごとに）担当する場合もあったようだ。もちろん刻工は文字の相違を認識する能力なら有していたろう。だが文章の意味を考えて原稿の誤字やあいまい字を直すほどの熱意は持ち合わせていなかったようで、原稿どおりに粛々と版を作成したと思しい。かくして兼善堂本には文意によって常識的に判断すれば防げる誤字や、辞書にない文字があまた出現することになってしまった。「有鬼」とすべきところを「有見」としたり、「得唐解元詩文字画」とすべきところを「得悟解元詩文字画」としたりしているのがそうした例である。

二 早稲田大学図書館本『警世通言』をめぐって

筆者が『警世通言』を含む中国通俗小説の刻本を網羅的に記載した『増補中国通俗小説書目』を汲古書院から刊行したのは1987年5月のことであるが、その時点では早稲田大学図書館に『警世通言』は蔵されていなかった⁷。この

⁷ 上記註4の伴論文は、早稲田本が1993年に早稲田大学図書館特別資料室に受け入れられたこと、そこに「天口書屋」、「而香」、「巢雲」の蔵書印が見えるが、その何人なるかについては不明と述べる。按ずるに、「天口書屋」、「而香」は「天香書屋」、「天香」であろう（「天香書屋」は「天香」に重ねて捺されている）。天香が何人なるかは未詳

ためこの『警世通言』（以下では「早稲田本」とよぶ）は拙目に著録されていない。もちろん上記の拙論でも論じていない。以下、伴俊典の紹介と筆者がその後調査したところによりその概要を記そう。

本文の行款は毎半葉 10 行毎行 20 字で、兼善堂本と一致する（なお本論が対象とする刻本はすべて 10 行 20 字本である）。封面はなく、巻頭に天啓甲子（4 年、1624 年）の豫章無礙居士の叙と「警世通言目次」、各巻あて 1 葉 2 面総計 40 葉 80 面の図像が冠される。また図像の第 1 葉表には「素明刊」の文字が見える。これら諸点はすべて兼善堂本に一致する。所収の 40 巻 40 篇の内容についても同様である（後述のごとく、『警世通言』には同じく 40 巻 40 篇ながらその一部を差し替えた刻本が存在する）。本文は、第 21 巻「趙太祖千里送京娘」末の第 26 葉が補写によって補われ、第 25 巻「桂員外途窮懺悔」の第 17 葉、第 18 葉、第 28 巻「白娘子永鎮雷峰塔」の第 25 葉、第 26 葉が他と異なる有界葉である以外、兼善堂本と同じく無界である。有界の葉については、当該の版本 2 面 4 葉分が失われるなどしたため、補刻（ないしは別系統の 10 行 20 字本の版本で補配）したものともみなせる。なお第 21 巻最終葉の逸失については、それが偶数葉でありなおかつ直前の第 25 葉が存在していることに鑑み、装丁ないし印刷の際のミスによる落丁、ないしはその後の逸失とみられる。版面の字様は叙、目次、本文とも兼善堂の刻本に酷似する。図像も兼善堂本の図像と瓜二つで、「素明刊」の文字も見えるから（後述の佐伯文庫本には見えない）、兼善堂本の版本を用いた、蓬左文庫本以降の印本とみなされてきた⁸。ちなみに素明は劉素明のことで、明の万曆以降の戯曲小説の挿図を描いた画工である⁹。

早稲田本の第 25 巻の「桂員外途窮懺悔」には、前記のごとく第 17 葉と第 18 葉に有界葉が見える。この第 17 葉と第 18 葉、もちろん内容は接続しているのだが、直前の第 16 葉とも、直後の第 19 葉とも接続していない。早稲田本の第 17 葉、第 18 葉を倉石文庫本、蓬左文庫本と較べると、以下の点が判

だが、「巢雲」は最嶽元良であろう。最嶽元良は、寛永 10(1633)年に死んだ以心崇伝を継いで金地院 2 代住持（南禅寺 274 世）となったとされ、寛永 18(1641)年の「自得院像」に記した賛が伝存する。

⁸ 伴俊典は「早稲田本の図は蓬左文庫本の図版と完全に一致する。倉石本は欠葉になっている図巻十七を除き完全に一致する」、「早稲田本が倉石本、蓬左文庫本に次ぐ古いテキストであり、兼善堂の版本を印行したものであることは確実である」、「結論から述べれば早稲田本は蓬左文庫本、倉石本に比べて…同版後印とするのが適当である」とする。ただ、種々の点を検討した後、「倉石本及び蓬左文庫本と早稲田本のテキストの関係は単なる印刷の先後のみではないことも分かる」ともいっている。

⁹ 劉素明について、筆者はかつて「四続研究前後」（『中国古典小説研究』第 5 号所収、1999 年 12 月）の「2 劉素明はなにものなのか」において、方彦寿の、劉素明が金陵の書肆のみならず建陽の書肆にも絵図を刻したとの説に疑問を呈し、「劉素明は金陵の複数の書肆と契約し、もっぱら絵図のみを刻していた。これがまずもって確実な事実であろう」と述べた。劉素明の名が見える刻本に、明らかに建陽の書肆である師儉堂のものがあるのを承知しつつ、そこに見える「依京原版（刻）」の文字に「金陵で刷印したものに、現地で牌記を刷り込んだ」可能性をみただからである。就いて参照されたい。なお現在はこれとも異なり、建陽の書肆が、金陵の書肆の刊行物を当該の書肆に無断もしくは許可を得て、図像の画工名まで含めまるごと覆刻した可能性を考えている。

明する。話をわかりやすくするため、以下では葉数によってではなく、両面に本文を彫った版木を想定し、それによって説明することにする。すなわち、第1葉と第2葉については版木1、第19葉と第20葉については版木10とよぶことになる。なお既述の通り版木の順については倉石文庫本が正しいので、以下の版木の順に関する議論においては倉石文庫本をもって兼善堂本とすることにする（ちなみに現在市販されている兼善堂本の影印本はすべて落丁、乱丁のある蓬左文庫本によっているが、今後影印の機会がある場合には倉石文庫本によったうえで図像第17葉を蓬左文庫本で補配すべきであろう）。

兼善堂本の第25巻第17葉、第18葉（版木9）の版刻を担当した刻工が、理由は不明ながら、「十七」、「十八」とすべき版心の葉数を「十七」、「一十八」と彫ってしまった。これだけならさしたる問題とはならなかったのだが、第27葉、第28葉（版木14）の版刻を担当した刻工も「二十七」、「二十八」とすべき版心の葉数の「二」を彫り落とし、「十七」、「十八」としてしまったから話がややこしくなってしまった（両刻工が同一人か否かは不明）。第25巻に版心を「十七」、「一十八」とする版木と「十七」、「十八」とする版木が存在することになったからである。当初はそれでも正しい順序に版木は並べ保管されていたようだが、蓬左文庫本が印刷される時点までに二枚の版木は入れ替わってしまっていたようである（印刷された後で二葉ずつ入れ替えられたと考えるよりこのほうが合理的であろう）。「一十八」の「一」を「二」の彫り損ないとみて、文章の接続具合を勘案することなく、両者の版木を入れ替えてしまったのであろうか。当然ながら、蓬左文庫本の第16葉（版木8の裏）から第17葉（版木14の表）、第18葉（版木14の裏）から第19葉（版木10の表）へは文章が繋がらない。のみならず第26葉（版木13の裏）から版心に「十七」とある第27葉（版木9の表）、版心に「一十八」とある第28葉（版木9の裏）から第29葉（版木15の表）についても文章が繋がっていない。そもそも第25巻の版木の版心には誤刻が多かった。「二十四」であるべき第24葉が「一十四」となっているほか、「二十六」であるべき上述の第26葉も「十六」となっている。こうした版心葉数の誤刻は兼善堂本の他の巻にも見られるが、版木が入れ替わり、文意不通という結果を来した例は他にはない。

ひるがえって早稲田本の第25巻であるが、蓬左文庫本で提前された版木14を有界葉に彫り替えている。のみならず、これと入れ替わって本来版木14が配されるべき位置に置かれた版木9の版心の葉数「十七」、「一十八」をわざわざ「二十七」、「二十八」に修正している。この二葉は無界のままだから、ここでは版心だけを修正したことになる。版心の葉数を改めてもそれで文意が通ずるわけではないのだから、早稲田本を出版した書肆の老板の教養のほども知れようというものである。

三 巻数表示の混乱

次に、これまであまた論ぜられながらもまだに結論のでていない、兼善堂本『警世通言』40巻40篇における各篇の配列の問題について論じてみたい。

兼善堂本の『警世通言』には目次、図像、本文における各篇の配列順に相違が見られる。のみならず、図像の内容と版心の巻数表記、本文の巻頭の巻数表示と版心のそれとの間にも不一致が見られる（別表1を参照されたい）。

以下においてこの問題について検討を進めてゆくわけであるが、それに先立って、『警世通言』に収められる各篇が、『古今小説』の場合と同様、二十対のペアを構成している事実を確認しておく必要がある。『警世通言』を構成する40篇の作品の題名は、第1巻が「兪伯牙捧琴謝知音」、第7巻が「陳可常端陽仙化」のように、7字ないし8字一句からなっているのだが、奇数番目の篇とこれに続く偶数番目の篇の題名は字数のみならず句の構成も一致し、対句となっている。たとえば第2巻は「莊子休鼓盆成大道」、第8巻は「崔待詔生死冤家」となっていて、ともに第1巻の「兪伯牙捧琴謝知音」、第7巻の「陳可常端陽仙化」と対をなしている。内容についても相互に何らかの意味で対をなしていることまた論を待たない¹⁰。

『警世通言』の目次、図像、本文の配列順に不一致が見られる巻は第34巻、第35巻、第39巻の三巻である。これらはそれぞれ第33巻、第36巻、第40巻と対をなすべき巻であるから、題名もこれらに対応するものでなくてはならない。一方、倉石文庫本、蓬左文庫本、早稲田本のいずれにおいても、目次の配列は一致しているのみならず、その第33巻と第34巻、第35巻と第36巻、第39巻と第40巻は対をなしている。したがって『警世通言』に目次を付し刊行した人物（以下では叙で言及される「隴西君」をこれにあてておく）が最終的に意図した配列順は明らかである。念のためそれを下記しておこう。ちなみに第35巻と第36巻の場合、本文題のままでは字数は一致しても対句を構成しないために目次題のように改めようとしたのであろうが、すでに版木は出来上がっていて、本文題を改めることは断念したと思われる。本文題と目次題の不一致は他にも存するが、皆同様の意図による改変であろう（以下の論述における巻次と篇名は下記による）。

- 第33巻 喬彥傑一妾破家
- 第34巻 王嬌鸞百年長恨
- 第35巻 況太守路断死孩児 本文題は況太守断死孩児
- 第36巻 趙知鼎火焼皂角林 本文題は皂角林大王仮形
- ……
- 第39巻 福祿寿三星度世
- 第40巻 旌陽宮鉄樹鎮妖

倉石文庫本ならびに早稲田本の本文の配列も上記の通りであるから、蓬左文庫本の本文の配列（別表1を参照されたい）は、かつて倉石文庫本を刷った版木により増刷を企てた書肆の老板のさかしらにすぎまい。しからば倉石文庫本には兼善堂以外の書肆により刊行された可能性があることになる（それゆえ以後は兼善堂本とよばず、倉石文庫本とよぶことにする）。だが早稲田本の40篇の配列が目次、図像、本文とも上記の通りなのに、倉石文庫本では図像が「王嬌鸞百年長恨」、「況太守路断死孩児」で入れ替わっており、その版心の巻数表記が「王嬌鸞百年長恨」の表で「卷三十九」、裏では「卷三十四」と（なっているように）見え、「況太守断死孩児」では「卷三十四」、「福祿寿

¹⁰ この点については、内田道夫「古今小説の性格—歴史と小説—」（『文化』17-6所収、1953年）、福満正博「『古今小説』の編纂方法—その対偶構成について—」（『中国文学論集』第10号所収、1981年）ならびに河井陽子「三言の編纂方法について」（『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第1号所収、1988年4月）などを参照されたい。

三星度世」では「卷三十五」となっている点については別途説明がなされねばなるまい。

そもそも倉石文庫本の本文、図像に見える巻数表記ならびに図像の配列順に混乱が生じた原因であるが、「第三十五巻」あるいは「卷三十五」とあるべき「況太守断死孩児」の本文の巻頭、版心、巻末に見える巻数表記や図像のそれをすべて「第三十四巻」、「卷三十四」と誤ったことに由来すると考えるべきであろう。しかし仮にそうだとすると、本文版心の葉数表記の場合のようにその原因を刻工の粗忽に帰すことはできまい。上に記した最終的な各篇の配列に先立ち、「況太守断死孩児」を第34巻とし、第33巻の「喬彦傑一妾破家」と対とする構想があった可能性があるからである。その場合、「福祿寿三星度世」を第35巻とし、「皂角林大王仮形」と対とするつもりだったろう。だが「王嬌鸞百年長恨」と「旌陽宮鉄樹鎮妖」とでは対とするのにも無理がある。そこで「況太守断死孩児」を第34巻とする構想は放棄され、現行の配列に落ち着いたのではあるまいか。ただ最終決断が遅れたため版刻が進んでしまい、放棄された構想の痕跡が本文、図像の巻数表記の混乱という形で残ってしまったのであろう¹¹。

既述のごとく、伴俊典は早稲田本を「兼善堂本」（倉石文庫本と蓬左文庫本の総称として以後はこの言葉を使う）の同版後印とみたわけだが、その結論の当否を論ずるにあたっては、それ以前に検討しておかねばならないことがある。「兼善堂本」と早稲田本が酷似していることは事実なのだが、完全に一致しているわけではないという点がそれである。表1には土と土、大と天、王と主のような早印、後印の違いに由来する可能性が排除できないものを除いた、両者の明白な相違を表として掲げておいた。ちなみに斜体字は誤刻、太字は正しい刻字であることを、■は墨格、□は空白であることを示している（種々の事由により誤りとまではみとめられないものについてはそのままとし、下線を付しておいた）。

以下ではこの表1ならびにそのもととなった別表2により「兼善堂本」と早稲田本の刊行時期の先後について検討してゆくのであるが、その前にあらかじめことわっておかなければならない点がある。それは別表を作成するにあたっての手順についてである。筆者は「兼善堂本」を読み、その墨格、空白ないし意味不明の箇所に着目すると早稲田本（及び後述する佐伯文庫本、衍慶堂本ならびに三桂堂本）を参照し別表2を作成した。表1はそれをもとに作られている。したがって表1に多出するケースとは逆の、早稲田本などは誤っているが「兼善堂本」は正しいという例が漏れている（否、まったく採られていない）可能性が否定できないのである。そうした危惧がないわけではないのだが、表1による限り、「兼善堂本」の誤刻が早稲田本では正しく刻されている例が多数存在することに疑問の余地はあるまい。そうなる

¹¹ 廣澤裕介「兼善堂本『警世通言』の成立—長沢規矩也氏の問題提起に対する一回答—」（『汲古』第39号所収、2001年5月）はこの間の状況を、『通言』とは異なるもう一つの本（あるいは本となるべきもの）の存在（本X）を想定して論じているが、その際に『警世通言』として倉石文庫本ではなく蓬左文庫本を念頭においており、ために筆者と結論が異なる。また「兼善堂本を『通言』の初版本である」とする判断には同意できない。

と「兼善堂本」が最古、最良の刻本であるとの定説も疑わしくなってくる。早稲田本（刊行書肆、したがって刊行時期も不明）が正しく刻した文字を「兼善堂本」が誤刻した可能性も否定できないからである。

表1 「兼善堂本」、早稲田本本文異同表

巻次	題名	葉行	「兼善堂本」	早稲田本
第11巻	蘇知縣羅衫再合	36b10	祖墳 <small>此</small> 葬	祖墳 <small>埋(埋)</small> 葬
第12巻	范鰍兒雙鏡重圓	5a1	俊卿之庸不足	俊卿之妻就是
第15巻	金令史美婢酬秀童	20a2	金滿已脱了干紀	金滿已脱了干繫
第21巻	趙太祖千里送京娘	8a1 11b2	俺留個記□在此 小二口 <small>土</small> 鮮血	俺留個記 <small>號</small> 在此 小二口 <small>吐</small> 鮮血
第22巻	宋小官團圓破氈笠	11b7	凡船戶虫	凡船戶眾
第23巻	樂小舍拚生覓偶	2b6	不忍殺乏	不忍殺害
第24巻	玉堂春落難逢夫	46a10	玉姐 <small>任</small> 傍	玉姐 <small>在</small> 傍
第26巻	唐解元出世玩世	1b10 3a8	為?榜首 答拜□遠來朋友	歷榜首 答拜那遠來朋友
第27巻	假神仙大鬧華光廟	7b2 7b6	魏生 兀自不肯 <small>實</small> ■	魏公 兀自不肯 <small>實</small> 說
第28巻	白娘子永鎮雷峰塔	16a1 32a5	搭船到這■尋你 不幸逢妖愁更□	搭船到這裡尋你 不幸逢妖愁更喜
第29巻	宿香亭張浩遇鶯鶯	4b3	此事切宜緘 <small>只</small>	此事切宜緘□
第30巻	金明池吳清逢愛愛	7b9	奴家■前生有緣	奴家与你前生有緣
第33巻	喬彥傑一妾破家	18b3 18b10	兩個 兩個月	兩個 兩個月
第34巻	王嬌鸞百年長恨	7b9 8b8 9a4 19a5	長在衛裏服 <small>後</small> 央趙学■往王千戶處 ■死靡他 糧督■/曆姓字春	長在衛裏服役 央趙学師往王千戶處 至死靡他 糧督南麻姓字春
第35巻	況太守斷死孩兒	12b6	來作弄我	來作弄我
第36巻	趙知縣火燒皂角林	9b10 10b9 11a1	■婆便請 皂角林文王 要去問牢□營端公	婆婆便請 皂角林大王 要去問牢城營端公
第37巻	萬秀娘仇報山亭兒	17a3	如今与你一箇執照 <small>掃</small> 未	如今与你一箇執照 <small>掃</small> 去

四 佐伯文庫本と三桂堂本について

豊後佐伯藩第八代藩主毛利高標によって蒐集された漢籍（佐伯文庫本）のおよそ半分二万冊は第十代藩主高翰により文政11(1828)年7月に幕府に献上され、明治維新後その大半は内閣文庫と宮内庁書陵部に引き継がれた。一方、佐伯藩に残された二万冊の多くは散逸し、一部が国会図書館や大分県立図書館などに蔵されるほかは所在不明となった。海を渡り中国に帰ったもの、アメリカに渡ったものもある。そのなかで、『警世通言』を含む通俗小説の多く

は幸いにも散逸を免れ、現在も佐伯市立図書館に蔵されている¹²。筆者の前掲註 1 の論文はそのうちの『警世通言』を紹介したものであるが、以下に改めてその要点を記そう。

佐伯文庫本『警世通言』(以下では「佐伯文庫本」とのみ記す)は「兼善堂本」、早稲田本と同様 40 巻 40 篇からなっている。第 3 冊にあたる本文第 7 巻から第 11 巻と、第 37 巻の第 1 葉から第 3 葉を失っている。封面も失われており、刊行書肆は不明。図像 40 葉 80 面は欠けることなく残っている(図像の配列は早稲田本に一致する)。だが「兼善堂本」、早稲田本の図像とは明白な異版で、「素明刊」の文字も見えない(図像が「兼善堂本」と異版であることならびにその根拠については註 1 の拙論に記した)。加えて図像の版心ならびに本文の版心、巻頭などにみえる巻数表記の混乱についても本文の配置に合わせて修正され、隴西君の最終意図に沿ったものとなっている(本文題と目次題の相違も目次題に統一されている)。叙、本文の行款は「兼善堂本」などと同じであるが、そのいずれとも異版である(この点については後述する)。さらにこれが最大の相違なのであるが、第 40 巻を「旌陽宮鉄樹鎮妖」から「葉法師符石鎮妖」に差し替えている。しかし図像は「旌陽宮鉄樹鎮妖」のものだから(「葉法師符石鎮妖」の図像はないということ)、佐伯文庫本以前に、その第 39 巻までの版木と、佐伯文庫本では「葉法師符石鎮妖」に差し替えられた「旌陽宮鉄樹鎮妖」の版木を使った版本が存在していたことを窺わせる(図像、本文、叙とも「兼善堂本」、早稲田本と異版であるから、当初から第 40 巻を「葉法師符石鎮妖」とするつもりだったとは考えにくい)。

ひるがえって佐伯文庫本と同様第 40 巻を「葉法師符石鎮妖」とする『警世通言』に、『舶載書目』の「寛文元(1661)年点検書目」に著録される三桂堂王振華本がある(現在所在不明)。「寛文元年点検書目」の記載によれば、この三桂堂本は第 24 巻についても本来の「玉堂春落難逢夫」ではなく、第 6 巻の「俞仲举題詩遇上皇」の入話部分を独立させた「卓文君恵眼識相如」に差し替えられているという。図像も「兼善堂本」などの半分の 20 葉 40 面というから、「三言」随一の長篇「旌陽宮鉄樹鎮妖」と『警世通言』第 2 の長篇である「玉堂春落難逢夫」を長篇であるがゆえに嫌って短篇に差し替え、図像についても半数に減らし利益の拡大を図った後世の刻本のようにみえる。

三桂堂はその後、同一の版木により、図像を 19 葉とし第 39 巻と第 40 巻を削った 38 巻本、さらに図像を 18 葉とし第 37 巻と第 38 巻も削った 36 巻本を刊行した。図像の葉数こそ収録篇数に合わせてあるが、必ずしも本文の各篇と対応しているわけではないから、失われた図像の版木があり、それらを補刻せず、残った版木で間に合わせたと考えられる。

ここで注意しなければならないのは、三桂堂本は俗字(簡筆字)の多いテキストであって、叙、目次、本文とも「兼善堂本」、早稲田本はもとより、佐伯文庫本とも異版であるということである(そもそも三桂堂本には眉批がな

¹² 佐伯文庫と佐伯文庫本については筆者の平成 15 年度～平成 16 年度科学研究費補助金(特定領域研究(2))研究成果報告書『江戸時代における漢籍の流転—佐伯文庫を例に—』(著者自印、平成 17 年 2 月)第 1 分冊所収の「佐伯文庫旧蔵暨現存書目録(漢籍之部)」ならびにその解説、第 3 分冊「佐伯文庫本関連論文」所収の諸論文を参照されたい。

かった)。現存の図像はすべて2面(表裏)でセットになっているのだが、当初から図像の数を半分にするのを考えていたなら、各篇から1面あて残せばよさそうなものを、なぜ40葉の図像のうち半数の篇のものを残し、そこに刻まれた韻文を削り落として(痕跡が残っている)どの篇の図像かわからなくしたのか。もちろん図像も表裏2面が一枚の版木の同一面に刻されていたからに相違ない。いずれか1面のみを残すには、版木の半分を棄てねばならないからである¹³。

ひるがえって三桂堂本の図像だが、「兼善堂本」や早稲田本の図像より佐伯文庫本の図像に似ている¹⁴。だが佐伯文庫本とも異版であった。つまり三桂堂本の図像は後述する衍慶堂本のそれを含め、すべての現存する『警世通言』の図像と異なるのである。しからば三桂堂の営為は、自身新たに40巻40篇で図像40葉80面を備えた『警世通言』を重刻刊行したのだが、増刷を繰り返すうち図像の版木の多くが使用不能となったため、使用可能な図像の版本から韻文を削り落とし、どの篇のものかわからなくして数合わせをしたか、同様の行為を、いずれかの書肆から入手した既存の、おそらく40巻40篇からなる『警世通言』の版本を対象に行なったかのいずれか、ということになるろう。

三桂堂本¹⁵が俗字の多い版本であることはすでに述べた。図像の数も「兼善堂本」の半分であるし、40巻→38巻→36巻と身をやせ細らせつつしづとく出版を継続しているから、後世の利益第一の出版物のように思われてきた。ところがそこに見える「兼善堂本」や早稲田本との文字の相違に着目するなら、従来のこの認識とは異なる姿が見えてくる。誤刻に限るなら、「兼善堂本」、早稲田本、佐伯文庫本、三桂堂本の順に数が減っているからである。『警世通言』という通俗小説の刻本とはいえ、劉素明の図像40葉を冠する先行する刻本(「兼善堂本」ならびに早稲田本)に誤刻が多く、後に刊行されたと思しい

¹³ 東京都立中央図書館特別買上文庫所蔵(田中乾郎旧蔵)の40巻残本の図像は、順に「兼善堂本」の第11、12、13、14、15、16、17、18、19、20、21、22、33、34、35、36、37、38、39、40巻表裏の、東京大学東洋文化研究所双紅堂文庫所蔵の36巻本の図像は、順に「兼善堂本」の第11、12、13、14、15、16、17、18、19、20、21、22、40、34、33、36、37、38巻表裏の図像となっている。36巻本刊行の時点で、版木が使用不能となった第35巻の図像を最後の第40巻の図像と差し替えたものと思しい。ただし第33巻と第34巻の図像を前後入れ替えた理由はわからない。

¹⁴ 前掲註1の拙論で、佐伯文庫本と「兼善堂本」の図像の相違する箇所をいくつか指摘したが、三桂堂本の対応する箇所のすべてが佐伯文庫本に一致している。

¹⁵ 三桂堂の「寛文元年点検書目」著録40巻本が三桂堂の原刻本か否かは不詳。ただしその後修本なら台湾の中央図書館に蔵されている。またそのやや早印本(ただし封面を欠き、叙、目次、図像20葉と第2巻の第10葉以前のみを存する)が東京都立中央図書館特別買上文庫(田中乾郎旧蔵)に蔵されている。北京大学図書館馬氏書所蔵本は補抄2篇を含むが、図像19葉を冠するから38巻本とみてよかろう。首都図書館蔵本は38篇を収めるようだが、図像の数については明らかでない。36巻本はかなりの数が現存している。かつて調査した台湾中央図書館40巻本を今回再調査することができなかつたため、本論では三桂堂本として、東京都立中央図書館特別買上文庫本の同版後印本で、Web上で公開されている東京大学東洋文化研究所双紅堂文庫所蔵の36巻本を使用した。なお双紅堂文庫本の封面には「三桂堂王振華謹識」の文字が見えている。

本文の彫りが荒く俗字の多い、図像も粗雑かつ本来の半数以下の三桂堂本にかえて誤刻が少ないのはなぜなのか。

五 衍慶堂の24巻本『警世通言』と『二刻増補警世通言』

『警世通言』を含む三言はすべて40巻40篇からなっているのだが、後にはそのすべてに24巻24篇本が作られた。衍慶堂の刊行になる『諭世明言(重刻増補古今小説)』(内閣文庫所蔵)と『警世通言』(天理図書館節山文庫所蔵)¹⁶、刊行書肆不明の『醒世恒言』(東京大学東洋文化研究所双紅堂文庫所蔵)がそれである。このうち24巻本『警世通言』には先行する同じ衍慶堂の『二刻増補警世通言』(大連図書館旧蔵、現在所在不明)があり、24巻本はこれを節略してなったものと考証されている。この『二刻増補警世通言』、増補を銘打ってはいるが、実のところ4篇を『古今小説』と差し替えたものに過ぎない。24巻本『警世通言』と『二刻増補警世通言』の関係につき、長沢規矩也は「二十四巻本は二刻増補本に出づ。但し、巻二十(二刻本巻四十)のみ、二刻本には目ありて本文を缺く……削本は二刻本の後印にして、殊に、図像は両者全く同板後印に係り……故に、削本は二刻増補本の削本たること明らけし」とする¹⁷。既述のごとく『二刻増補警世通言』は『古今小説』の4篇(その第19巻、第20巻、第29巻、第30巻)を収めているのだが、その削本たる24巻本『警世通言』にも『古今小説』の第19巻が収められている。李田意は「第十九巻范巨卿……係出自古今小説並且和天許齋刊本第十六卷是同板。其餘各篇都是原来通言裏の小説；作者亦曾一一和蓬左本通言対過。完全是同板後印」と、この第19巻「范巨卿雞黍死生交」については『古今小説』の天許齋本、それ以外の23篇については蓬左文庫本と同版とみている。長沢、李両人の説が正しいなら、24巻本『警世通言』の第19巻以外は『二刻増補警世通言』と同じ版木によっており、それはすなわち蓬左文庫本(つまり「兼善堂本」)の版木であるということになる。『二刻増補警世通言』未見の今、この前半部分の当否については判断を保留せざるをえないのだが、後半については「殊に、図像は両者全く同板後印に係り」と本文についての判断を避けた長沢規矩也の慎重な意見がうべなえる。「范巨卿雞黍死生交」を除く衍慶堂24巻本『警世通言』所収各篇の文字と、「兼善堂本」の文字とが完全に一致するわけではないからである。しかも、字面が明確に異なる三桂堂本については比較するまでもないのだが、衍慶堂本は早稲田本や佐伯文庫本とも文字が異なる箇所があるのである。つまり40巻本の『警世通言』を刊行した書肆としては、従来から知られていた金陵兼善堂、三桂堂王振華のみならず、『二

¹⁶ 衍慶堂刊行の『二刻増補警世通言』ならびに24巻本『諭世明言(重刻増補古今小説)』、24巻本『警世通言』については、廣澤裕介『『諭世明言』四十巻考』(『日本中国学会報』第52集所収、2000年10月)を参照されたい。

¹⁷ 馬廉の「大連満鉄図書館所蔵中国小説戯曲目録」(『馬隅卿小説戯曲論集』所収、中華書局、2006年8月。原載『図書館季刊』第2巻第4期、1928年12月)に見える『二刻増補警世通言』所収諸篇の第24巻までの配列は、24巻本『警世通言』本文の配列とは一部異なるが、図像の配列とは一致する。24巻本はおそらく『二刻増補警世通言』の第24巻までの本文の版木のうち3篇をその第25巻以降のものとして差し替えた(24巻本では第8巻、第19巻、第23巻がそれにあたる)、図像については差し替えることなくそのまま用いたのであろう。

刻増補警世通言』を刊行した衍慶堂、さらには早稲田本、佐伯文庫本を刊行した二書肆のあわせて五書肆があり、各書肆ともその刊行に際しては入手した版木を修正するか新刻するかして出版したとみられるのである（倉石文庫本と蓬左文庫本の間には明確な文字の相違はみられない）。

衍慶堂は40巻40篇本の『醒世恒言』（ただし毎半葉12行毎行22字、無図）と40巻40篇本の『二刻増補警世通言』、24巻本の『警世通言』ならびに『諭世明言』を刊行したことで知られる。なかで注目されるのが、ともに24巻からなる『警世通言』と『諭世明言』が互いに数篇を入れ替えて出版されていることである。24巻本『諭世明言』には『醒世恒言』に出自を持つ作品も2篇収められており、行款は毎半葉10行毎行20字であったが、いずれも原刻本とされる葉敬池本『醒世恒言』とは異版であった¹⁸。また、既述の刊行書肆不明の24巻本『醒世恒言』には『醒世恒言』に出自を有する作品が22篇収められているのみならず、『警世通言』ならびに『（初刻）拍案驚奇』に由来する作品がそれぞれ1篇収められていた。

衍慶堂は当初、おそらくより多くの利益を求め、篇数については40篇のままながら（ただし後日第23巻「金海陵縦欲亡身」を省き、第20巻の「張廷秀逃生救父」を上下に分割して第20巻と第21巻とし、もとの第21巻を第23巻に移した40巻39篇本を出版している）、行款を葉敬池本の毎半葉10行毎行20字から12行22字と改め、図像を省いた『醒世恒言』を刊行した¹⁹。当然『警世通言』と『古今小説』についても同様の行款による出版を考えたに相違ない。だが先行する書肆の版木を入手したためであろう、それを流用し、篇数、行款は変えず、図像も残し、両者の数篇ずつを入れ替え、「増補」を銘打って売り出す方針に変更した（衍慶堂による『醒世恒言』の刊行が『警世通言』、『古今小説』の版木入手以後のことなら10行20字によって刊刻されたはずである）。それが『二刻増補警世通言』であった（同じころ衍慶堂からは『諭世明言』あるいは『古今小説』を銘打つ40巻本が刊行されたと思われる）。40巻本三言のシリーズを完成させた衍慶堂は、その後同様のコンセプトながら巻数を24巻に減らした新シリーズを企画した。それが現存する24巻本の『諭世明言』であり『警世通言』であった。『今古奇観』などの盛行により、40巻本が市場に受け入れられなくなってきていたからであろうか、それとも図像や本文の版木の傷みが進行し、増刷に堪えないものが増えてきたからであろうか。だが24巻本シリーズの刊行にあたっては、かつて自ら刊刻した40巻本『醒世恒言』の存在が悩ましかったはずである。衍慶堂40巻本『醒世恒言』の本文の行款は24巻本の『諭世明言』や『警世通言』とは異なる。図像も省いてしまっていた。だからその版木を24巻本シリーズに転用するわけにはゆかない。そもそも40巻本の版木を所有しており、それが利用可能な状態にあるのなら、24巻本用に版木を新刻するなど烏滸の沙汰である。かくて衍慶堂は24巻本の『諭世明言』用に2篇のみ新刻（または他の書肆から版

¹⁸ 李田意の前掲註6の論文は「另有二篇出恒言，与葉敬池本恒言並不同板」とする。いうまでもないが、葉敬池本の同版後印本とされる葉敬溪本とも異版である。

¹⁹ 「金海陵縦欲亡身」を削除したのはそれが淫蕩な内容だったからではなく、当初後金を称していた清朝を憚ったからと考えられる。したがって、衍慶堂の40巻40篇本は明代に刊行され、39篇本は清朝となってから刊行されたとみてよからう。

木を譲り受けるか) ただで、24 卷本『醒世恒言』の刊行については断念したと思しい。しかく考えるなら、現存する 24 卷本『醒世恒言』を刊行した書肆は衍慶堂ではないことになる。

ひるがえって衍慶堂 24 卷本『諭世明言 (重刻増補古今小説)』と刊行書肆不明の 24 卷本『醒世恒言』であるが、この両者にはそれぞれ 1 篇、『警世通言』に出自を持つ作品が収められていた。40 卷本では第 27 卷と第 23 卷にあたる「仮神仙大鬧華光廟」と「樂小舎拵生覓偶」がそれである。この 2 篇のうち、「仮神仙大鬧華光廟」につき李田意は「第二十三卷仮神仙……之本文及絵図乃出自通言……此篇的本文及絵図与兼善堂本通言的第二十七卷本文及絵図完全為同板」とするのだが、長沢規矩也は「仮神仙……の一篇は、本文匡郭の損壞部分により按ずれば同板後印らしく思はるれど……同板なりとはいひがたし」としている。別表 2 に明らかなように、「兼善堂本」と衍慶堂本とでは、この巻についても文字の異なる箇所が複数あるから、両者が同版なら一方が他方の後修本とみておくべきであろう (もちろん全部または一部の葉が異版の場合もありうる)。いずれにせよ長沢規矩也が正しく、李田意は誤っている。24 卷本『醒世恒言』所収の「樂小舎拵生覓偶」についても「兼善堂本」とは文字が異なるところがある。だが両者、とりわけ「仮神仙大鬧華光廟」が『二刻増補警世通言』のその同版後印本である可能性は否定できないし、むしろその可能性は高かろう。

六 総合的な考察

五種の『警世通言』の版本のうち、「兼善堂本」、早稲田本、衍慶堂本の三種は、相互に些少の文字の異動はあるものの、匡郭や版木の断裂を含め印面は酷似している。「旌陽宮鉄樹鎮妖」をその 1 篇とし、図像の第 1 葉表に「素明刊」の文字が見えることも共通する。よって兼善堂→早稲田本刊行書肆→衍慶堂の順に同一の版木が継承された、言い換えれば三者は同版の早印、後印の関係にあるとみなせる。しかし文字の異動を仔細に検討した結果、完全な同版とはいいがたいことがわかった。たとえば早稲田本や衍慶堂本の「趙太祖千里送京娘」の第 8 葉表第 1 行の「俺留個記號在此」の「號」は文字の位置が微妙にずれており、「仮神仙大鬧華光廟」の第 8 葉表第 1 行の「魏公道」の「魏」は文字の大きさ、傾きが周囲と異なっている。両者は「兼善堂本」では墨格であったり空白であったりする部分だから、その文字のみ埋木改刻して修正されたと思しい。よって両者は「兼善堂本」の後修本とみなせる。ひるがえって早稲田本の第 25 卷には蓬左文庫本と同様の乱丁 (と有界葉) が存在しているが、第 34 卷と第 35 卷の間には錯簡がない。この状況に鑑みるなら、早稲田本刊行書肆は入手した「兼善堂本」の版木に修正を施し、倉石文庫本と蓬左文庫本の間で存在した印本の順によって印刷したものとみられる。衍慶堂本は早稲田本に見える修正をすべて継承したうえで新たな修正を施した格好になっている。またその第 21 卷 (早稲田本の上記第 25 卷) の第 17 葉、第 18 葉が有界葉となっているから (早稲田本では第 28 卷の第 25 葉、第 26 葉も有界葉となっているが、この巻は衍慶堂の 24 卷本には収められていない)、衍慶堂は早稲田本の版木を受け継ぎ、これに再度修正を加えたとみられる。そこで以後はこれら三種の版本を「兼善堂本系諸本」とよぶことにしたい。とはいえ既存の版本の墨格や空白を後続の書肆がいかなる根拠

によって補ったのか。「兼善堂本」に現在未知の某書肆による原刻本があって、後続の書肆は「兼善堂本」の版木をその原刻本により修正したのであろうか。とはいえ「魏公道」の「魏」など、そもそも「兼善堂本」がこれを欠く理由がわからない。

三桂堂本は兼善堂本系諸本に較べ俗字の多いテキストである。佐伯文庫本はこれと異なる。むしろ兼善堂本系諸本以上に正字で刊刻されていた。先に論じた「仮神仙大鬧華光廟」第8葉表の「魏公道」の「魏」の文字の大きさも、佐伯文庫本では早稲田本と異なり、前後の文字と同一であった。佐伯文庫本には早稲田本と異なる形で「兼善堂本」の文字を改めた（ようにみえる）例がある。たとえば第30巻「金明池吳清逢愛愛」第7葉裏の「兼善堂本」が「奴家■前生有縁」とする部分を、早稲田本は「奴家与你前生有縁」と埋木改刻する。これを佐伯文庫本は「奴家思想前生有縁」としている。もちろん早稲田本と佐伯文庫本のいずれが本来のものであるかはにわかには判断できない（ともに正しくないこともある）。とはいえ別表2をみる限り、両者に異同がある文字全般についてみるなら、佐伯文庫本の方が圧倒的に正しい（可能性が高い）ことがわかる。佐伯文庫本は兼善堂本系諸本が同一の版木を遣い回していたのとは異なり、これとは別の版木によっている。眉批も兼善堂本系諸本に見えないものが多数あった（別表3を参照されたい）。もちろん逆の例、兼善堂本系諸本に見える眉批が佐伯文庫本に見えない例もないわけではない。だがそうした例の多くは版面が一見して異なる補刻葉、あるいは匡郭ごと眉批を削り取った痕が歴然としている葉にあった。そもそも佐伯文庫本は眉批、本文を通じ、兼善堂本系諸本以上に正字で刻字されていた。こうした状況から、佐伯文庫本は「兼善堂本」以前の版本、すなわち原刻本（もしくはそれに近い版本）の版木により、その一部の葉を補刻して差し替え、眉批の一部を削り取り、第40巻を「葉法師符石鎮妖」に差し替えた後修本（の後印本）とみられるのである。

ひるがえって佐伯文庫本は第40巻を「旌陽宮鉄樹鎮妖」ではなく「葉法師符石鎮妖」とするという点で三桂堂本に一致する。文字の異動についていえば、一部を除き、三桂堂本が「兼善堂本」から最も遠くかつ最も正しく（みえ）、佐伯文庫本がこれに次ぐ。三桂堂本は第40巻を「葉法師符石鎮妖」、第24巻を「卓文君恵眼識相如」とする40篇本以後、38篇、36篇と収録の篇数を減らし、図像についても40篇後修本の時点で20葉に半減させた後、38篇本で19葉、36篇本で18葉と本文の篇数に合わせて遞減させた。三桂堂本の図像を佐伯文庫本の図像と比較すると、同版ではないが同じ系統のものであり、兼善堂本系諸本のそれとは異なることがわかる。兼善堂本系諸本では無字であった図像第17葉裏の役人の持つ幟や、墨格であった第16葉表の看板に佐伯文庫本と同じ文字が見えるからである。ただ収録の図が本文に対応していないことに鑑みてであろう、本来図像中にあるはずの内容説明の韻文をすべて削除してしまっている。これらの諸点を勘案し、三桂堂本の図像は佐伯文庫本の図像を修正（一部削除）したものにより、本文については佐伯文庫本に校訂を加えて新刻したものによるとみておきたい（佐伯文庫本の版木は相当傷んでいる）。それゆえ以後はこの両者を「佐伯文庫本系諸本」とよぶことにしたい。

七 「旌陽宮鐵樹鎮妖」をめぐって

では佐伯文庫本はなぜ第 40 巻を「旌陽宮鐵樹鎮妖」から「葉法師符石鎮妖」に差し替えたのか。この点について考察するには、まずなぜ「旌陽宮鐵樹鎮妖」が『警世通言』に入ったかから考えなくてはならない。「旌陽宮鐵樹鎮妖」は鄧志謨²⁰の『(新鐫晋代許旌陽得道擒蛟) 鐵樹記』2 卷 15 回(内閣文庫蔵)とほぼ同じのものである。『鐵樹記』には萃慶堂余泗泉から「皇明万曆癸卯(31 年)春穀旦」を銘打つ竹溪散人の「豫章鐵樹記引」が冠された刊本(每半葉 11 行毎行 24 字)があり、その翌年にも同じ版本を使用したとみられる書肆不明の刊本が出版されている²¹。刊行とともに人気を博したのであろう(竹溪散人は鄧志謨のことである)。『警世通言』の編者隴西君はそこに目をつけ、『鐵樹記』を『警世通言』に組み込むことにしたとしい。ところがその後、「皇明大儒王陽明先生出身靖乱録」を新刻し、「済顛羅漢淨慈寺頭聖記」、「旌陽宮鐵樹鎮妖」と抱き合わせ、『三教偶拈』と題して刊行する企画がもちあがった。『三教偶拈』の刊年は定かでないが、「皇明」とある以上明の崇禎年間あるいは南明の時期とみてよからう²²。かくて「旌陽宮鐵樹鎮妖」の版本は「許真君旗(旌)陽宮斬蛟伝」と改題修正のうえそちらに流用されることとなった。佐伯文庫本の第 40 巻が「旌陽宮鐵樹鎮妖」から「葉法師符石鎮妖」に差し替えられることとなったゆえんである。

しかく考えることが許されるのなら、兼善堂本系諸本の版本は原刻本『警世通言』の『三教偶拈』刊行以前の印本によって重刻したものであり、佐伯文庫本の版本は、『三教偶拈』刊行以後の、「旌陽宮鐵樹鎮妖」が「葉法師符石鎮妖」に差し替えられた原刻本の版本によったものとみてよいのではあるまいか。ちなみに『三教偶拈』は無図本だったから、「旌陽宮鐵樹鎮妖」の図像は佐伯文庫本にそのまま使われた。「旌陽宮鐵樹鎮妖」が佐伯文庫本系諸本の『警世通言』から姿を消したのは、決してそれが不人気であったり三言一の長篇であったりしたからではなく、むしろその人気ゆえに『三教偶拈』の一篇として版本が流用されたためだったとしい。その証拠に、収録の篇数を大幅に減らした衍慶堂の 24 巻本にも「旌陽宮鐵樹鎮妖」は収められていた。

『三教偶拈』の「許真君旗(旌)陽宮斬蛟伝」は 10 行 20 字の無界本で、「兼善堂本」の「旌陽宮鐵樹鎮妖」と行款が一致している(『警世通言』の原刻本

²⁰ 鄧志謨の関わる通俗小説としては、『鐵樹記』以外にも、同じく萃慶堂余泗泉から刊行された万曆間刊本『(鏤唐代呂純陽得道) 飛劍記』2 卷 13 回ならびに万曆 31 年序刊本『(鏤五代薩真人得道) 呪棗記』2 卷 14 回のシリーズがある。よって『鐵樹記』の原刊本の刊行年についても万曆 31 年とみられる。なお呉聖昔に「鄧志謨郷里、名号、生平探考」(『明清小説研究』1992 年第 2 期所収)、「鄧志謨経歴、家境、卒年探考」(『明清小説研究』1993 年第 3 期所収)があり、潘建国に「晚明建陽書坊編輯の旅閩生活—以江西饒安鄧志謨為考察中心—」(『東アジア出版文化研究 ほしづくよ』所収、日本学術振興会アジア・アフリカ学術基盤形成事業、2010 年 3 月)がある。

²¹ 孫楷第の『中国通俗小説書目』巻五(中国大辞典編纂処・国立北平図書館、1933 年 3 月)に「国立北平図書館蔵万曆本…封面及卷一所題書肆名均剝去…与日本内閣本同板」とある。

²² 『中国通俗小説総目提要』(中国文聯出版公司、1990 年 2 月)の「皇明大儒王陽明先生出身靖難(マ)録」は日本の慶応乙丑(1865)弘毅館刊本では崇禎帝の諱が避けられているという。とすれば原刻本は崇禎ないし南明時期の刊本ということになる。

の版木によるとみて差し支えないということ)。「旌陽宮鉄樹鎮妖」は兼善堂本系諸本間において文字の異同が少ない篇の一つであるが、「許真君旗(旌)陽宮斬蛟伝」は佐伯文庫本の「葉法師符石鎮妖」以外の諸篇と同様、兼善堂本系諸本との間に文字の異同が多かった(別表2を参照されたい)。これは『三教偶拈』の「許真君旗(旌)陽宮斬蛟伝」が佐伯文庫本の他の篇と同様の特徴を備えていることを意味する。この事実もそれを『警世通言』の原刻本に収められていた「旌陽宮鉄樹鎮妖」(あるいはその模刻ないし重刻本)とみてよい一証となろう。ちなみに「許真君旗(旌)陽宮斬蛟伝」にも眉批があるが、その眉批は兼善堂本系諸本の「旌陽宮鉄樹鎮妖」の眉批より少ない(別表3を参照されたい)。よって原刻本の版木ではあっても眉批の一部は省かれたとみられる。なお萃慶堂余泗泉刊の『鉄樹記』に眉批はなかった。

ひるがえって『三教偶拈』所収の「皇明大儒王陽明先生出身靖乱録」であるが、その巻頭第2行に見える「墨愍斎新編」により、馮夢龍が編者とみなされている。墨愍斎は馮夢龍の斎名であった。また「皇明大儒王陽明先生出身靖乱録」には『警世通言』と同様毎行4字の眉批が附されていた。『警世通言』の編者が馮夢龍であるのなら、『警世通言』の原刻本にあった「旌陽宮鉄樹鎮妖」を「葉法師符石鎮妖」に差し替えたのは馮夢龍本人だったということになるだろう。

八 原刻本に最も近い刊本

むしかえすようではあるが、一般的には原刻本ないしそれに近い刻本ほど誤字、脱字は少ないはずである。『警世通言』の兼善堂本系諸本間にこの原則が成り立つなら、現在全巻残ってはいなくとも衍慶堂本が最も古く、早稲田本がこれに次ぎ、「兼善堂本」の刊行は最も遅れることになるはずである。だが本来の文字と知っていてそれをわざわざ墨格や空白に替えるはずはあるまい。衍慶堂本を兼善堂本系諸本の最古の刊本とみることにはやはり無理がある。一方、「兼善堂本」は「一時間」の「間」を「問」、「豪家查家」の「查」を「杳」などとす程度の低い誤刻もしている。さらに、「兼善堂本」の第12巻「范鰵児双鏡重円」には「原来俊卿之庸不足徐信的渾家崔氏」という意味不明な文言があるが、早稲田本はこれを「原来俊卿之妻就是徐信的渾家崔氏」とし(衍慶堂本は「范鰵児双鏡重円」を収めない)、第11巻「蘇州鼎羅衫再合」の「回涿州祖墳此葬」を早稲田本、衍慶堂本はともに「回涿州祖墳理(埋)葬」とする。こうした例は「兼善堂本」が原刻本あるいはそれに忠実な刻本であることに疑念を抱かしめるのに十分である。では早稲田本や衍慶堂本は「兼善堂本」の版木を何によって正したのか。今は失われたいずれかの書肆の原刻本(おそらく佐伯文庫本の原刻初印本)によったのなら誤刻はもっと少なかったはずである。よっておそらく前後の文意から常識的に判断したものに相違ない。だから修正は段階的でしかも不徹底に終わったのであろう。第24巻「玉堂春落難逢夫」には「不要他来昂然説銀」²³という意味不明の文言が見えるが、早稲田本、衍慶堂本ともこれをそのままにしている。こうし

²³ 「兼善堂本」(早稲田本、衍慶堂本も同じ)の「不要他来昂然説銀」を佐伯文庫本は「不要他来见我説罷」とする。上海古籍出版社の中国話本大系本の『警世通言』(魏同賢校点、1991年9月)はこれを「『…不要他来。』昂然説罷」とするが、佐伯文庫本により「『…不要他来见我。』説罷」とするべきであろう。

た不備はやはり「兼善堂本」の編輯者（またはそれを出版した書肆の老板）が指示した版下原稿の質に起因するとみておかねばなるまい。後続の早稲田本や衍慶堂本はそれを常識によって修正したが、しかるべきよりどころ（原刻本など）があったわけではなかったの、判断ができない箇所についてはそのままにしたのであろう。

では佐伯文庫本系諸本の文字が兼善堂本系諸本のそれに優っている点についてはどのように考えたらよいか。佐伯文庫本が原刻本の後修（後印）本であるなら、その文字が兼善堂本系諸本に優っていても不思議はなかろう。三桂堂本の図像は既述のごとく佐伯文庫本の図像を修正してなったものとみられる。しからば三桂堂本の本文も佐伯文庫本により新刻したものに相違ない。三桂堂本がそれにさらに校勘、修正していたなら、見たくれとは逆の、佐伯文庫本以上に完成度の高いテキストになっていてもおかしくはあるまい。

しかく考えるとき、最後に残るのは図像に見える「素明刊」の文字をどのように考えるのかという問題であろう。原刻本の署名のない図像を有名な画工の劉素明が覆刻しそれにその名を刻むとは考えにくい。しからば考え方は二つであろう。一つは、原刻本には図像がなかったが、「兼善堂本」がそれを重刻する際、劉素明に依頼し新たに図像を刻した²⁴。佐伯文庫本の図像はその模刻本であるというものである。もう一つの考え方は、今は失われた原刻本にも「素明刊」の文字はあり、「兼善堂本」は原刻本の図像を署名まで覆刻した。佐伯文庫本の図像は原刻本の図像にほかならないが、「素明刊」の文字は後修の際に削られたとするか、図像は後に模刻したものであって、「素明刊」の文字はその際に模刻されなかったとするものである。筆者は「兼善堂本」の図像では幟の文字や人間の一部が省略されている点に鑑み、二つ目の考え方の後者に与したい。いずれにせよ当面の問題は覆刻本が原刻本の図像を署名まで覆刻することがあるのかという一点にしばられよう。しかしそういうことは現実にあるのである²⁵。このように考えてくると、既述した「兼善堂本」の一部の巻の本文ならびに図像の巻頭、版心などに見える巻数表示の混乱についても、「兼善堂本」独自の事由によるものと考えておくべきなのかもしれない。

なお最後に一つ気になる点を挙げ本節の結びとしたい。それは兼善堂系諸本、佐伯文庫本系諸本を問わず、登場人物の名に前後で不一致が見られる点である。たとえば第22巻「宋小官団円破氈笠」のヒロインであるが、最初は宜男だったものが後には宜春となっている。第25巻「桂員外途窮饑悔」の桂生は最初桂富五と紹介されるのだが、後にはもっぱら桂遷とよばれる。第27巻「仮神仙大鬧華光廟」では魏宇が魏宗に変わっている。以上の三人はいずれも主人公またはそれに準ずる重要人物であり、その名が途中で変わるの、それが口頭で語られていたものを文字化したものであったにせよ、不統一の

²⁴ 上原究一「『李卓吾先生批評西遊記』の版本について」（『日本中国学会報』第63集所収、2011年10月）は劉素明ではなく劉君裕についてではあるが、「劉君裕の関わった李卓吾評本四大奇書は、むしろ新たな図を附すのを目玉とした第二世代のそれ（大塚：刊本）ではなかろうか」と述べている。

²⁵ 上原究一「唐氏世徳堂と周氏万巻楼仁寿堂の章回小説刊本の覆刻及び後印の事例について」（『中国古典小説研究』第16号所収、2011年12月）を参照されたい。

誹りは免れまい。「宋小官団円破氈笠」のヒロインは子のない夫婦の晩年にやっと生まれた女の子と設定されている。だから次に男子誕生を期待して宜男と名付けるのは理解できる。もちろんそれを成人後に変えることはありえよう。「桂員外途窮懺悔」の桂生は借金で首が回らず自殺寸前のところから員外とよばれるまでになった。だからその間に改名することはありうる。だがいずれにおいてもそうした説明は一切なされていないのである。こうした点も「兼善堂本」以前の原刻本を中途半端に修改した痕跡とみるのが可能かもしれない。だが以上の点については佐伯文庫本を含むすべての『警世通言』の版本において同様であるから、原刻本以前に存在していた単行の「話本」を『警世通言』に収録する際の改変の下手際とみておきたい。

結 論

衍慶堂は『警世通言』二種（二刻増補本と24巻本）と24巻本の『諭世明言』のみを刊行した書肆のようである。ではその活動時期はいつか。これらに冠される叙は原刻本のものであり、それにより衍慶堂の活動時期を定めることは出来ず、論理的に可能な上限が示されるだけである。兼善堂は『警世通言』のほか『古文備体奇鈔』十二巻を刊行しており²⁶、そこには崇禎十五年の序が冠されている。したがってこの年ないしはそれ以後にも活動していたことは間違いない。先に論じたごとく、40巻40篇本の『醒世恒言』は当初後金と称していた清朝に憚る必要のない時期に、39篇本はそうではなくなった時期に刊行されたと思しい。よって衍慶堂の活動時期、即ち『警世通言』二種の刊行時期についても天啓四年以降の明末清初とするのが妥当なところであろう。三桂堂40巻本が寛文元(1661)年以前に出版されたことは間違いないから、三桂堂本が参照した佐伯文庫本の刊行についても順治年間以前の明末清初の、『三教偶拈』の出版にやや遅れてといったところとみられる。ひるがえって「兼善堂本」であるが、当然原刻本の叙が書かれた天啓四年に刊行されたわけではあるまい。

最後に、『警世通言』の定本を作成するにあたっては、これまでのように「兼善堂本」を絶対視することなく、佐伯文庫本系諸本を含めた諸本を総合的に勘案してゆくことが必要であることを述べ、本論の結論としたい。

蛇足に類するが、以上を踏まえ、最後に再度『警世通言』諸本について簡潔にまとめておくことにしたい。

原刻本 佚

40巻40篇、第40巻は「旌陽宮鉄樹鎮妖」。図像は劉素明による。本文（及び叙）の版木の大半は佐伯文庫本に継承されたが図像の版木は失われたと思しい。刊刻書肆は不明。兼善堂ではなく、佐伯文庫本の刊行書肆と同一の可能性が有る。正字、眉批は最も多い。

佐伯文庫本系諸本

佐伯文庫本

²⁶ 杜信孚・杜同書『全明分省分県刻書考』（綫装書局、2001年12月）は兼善堂を金閨の書肆とし、「古今小説十(マ)巻」を刊行したとする。これは『古文備体奇鈔』の封面に「閩門兼善堂」とあるのによったのであろうが、軽率な判断といわざるを得ない。なお前掲註11の廣澤論文にこの点についての言及がある。

40 卷 40 篇、第 40 卷は「葉法師符石鎮妖」。図像は原刻本の図像を模刻したものか。本文の版木は原刻本の版木を継承したものだが、一部補刻と後修葉を交える。補刻、後修の時期は不明だが、第 40 卷を差し替えた時期は『三教偶拈』刊行時期の後か。刊刻書肆は不明。佐伯市立図書館蔵本はその後印本。原第 40 卷の「旌陽宮鉄樹鎮妖」は『三教偶拈』に「許真君旗(旌)陽宮斬蛟伝」として転用された。

三桂堂本

40 卷 40 篇。第 40 卷は「葉法師符石鎮妖」。第 24 卷「玉堂春落難逢夫」を省き、第 6 卷の「俞仲举題詩遇上皇」の入話部分を独立させた「卓文君恵眼識相如」と替える。佐伯文庫本の本文を受継ぎ、さらに校訂を施し簡筆字で新刻したもの。眉批はすべて削除。図像は佐伯文庫本の図像の半数を残しかつ修正したものか。遅くとも順治年間までには刊行された。その後 38 篇本、36 篇本が刊行される。

兼善堂本系諸本

「兼善堂本」

40 卷 40 篇。第 40 卷は「旌陽宮鉄樹鎮妖」。本文は原刻本の後印本を重刻したものか。その際、本文の一部を正字から簡筆字に改め、眉批の一部を削除した。墨格や空白が目立ち、本文の校訂は不十分。図像は画工の署名を含めて原刻本を模刻したものか。本文と図像の配置を改めようとした痕跡が本文の巻頭、版心、図像の版心の巻数表記にみられるが、途中でその構想は断念したらしい。倉石文庫本が早印で蓬左文庫本は後印。蓬左文庫本には錯簡がある。倉石文庫本には兼善堂以外の書肆が刊行した可能性もある。

早稲田本

40 卷 40 篇。第 40 卷は「旌陽宮鉄樹鎮妖」。本文は「兼善堂本」の版木を埋木改刻したものによる。蓬左文庫本の錯簡の一部を受継ぎ、そのまた一部を有界葉で補刻する。刊刻書肆は不明。図像は「兼善堂本」の版木を継承したものか。本文と図像の配列は原刻本にしたがっており、巻数表記の混乱はない。

衍慶堂『二刻増補警世通言』

40 卷 40 篇。うち 36 篇が『警世通言』のもの。残る 4 篇は『古今小説』のもの。現在所在不明につき詳細は不明。「旌陽宮鉄樹鎮妖」を収める。

衍慶堂 24 卷本

24 卷 24 篇。うち 22 篇が『警世通言』のもの。衍慶堂『二刻増補警世通言』の版木を継承したとされる。早稲田本の版木をさらに埋木改刻しており、その有界葉も継承している。図像は早稲田本の版木を継承したと思われるが、本文に完全に対応しているわけではない。図像を含め「旌陽宮鉄樹鎮妖」を収める。なお衍慶堂 24 卷本『重刻増補諭世明言』ならびに刊行書肆不明の 24 卷本『醒世恒言』にそれぞれ 1 篇、「兼善堂本」系の『警世通言』が収められる。

別表1 『警世通言』本文・図像、内容・巻数表示対照表

版本	順	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24		
	『兼善堂本』目次	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24		
倉石文庫本	本文内容	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24		
	本文巻頭	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24		
	本文版心	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24		
	図像内容	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24		
『兼善堂本』	図像版心	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24		
	本文内容	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24		
蓬左文庫本	本文巻頭	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24		
	本文版心	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24		
	図像内容	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24		
	図像版心	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24		
某書肆刊本 早稲田本	本文内容	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24		
	本文巻頭	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24		
	本文版心	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24		
	図像内容	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24		
二刻増補本	図像版心	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24		
	目次	1	2	3	4	5	6	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	22	22	25	26	26	37	38	
衍慶堂本	本文	1	2	3	4	5	6	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	22	22	25	26	26	37	38	
	図像40葉80図	不明																									
	本文内容	1	2	3	4	5	6	11	34	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	22	22	40	25	26	9	38	
	図像内容	1	2	3	4	5	6	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	22	22	25	26	26	37	38	
某書肆刊本 『醒世恒言』	本文内容	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
	図像内容	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
某書肆刊本 佐伯文庫本	本文・無図	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
	本文内容	1	2	3	4	5	6	逸失	逸失	逸失	逸失	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24		
三柱堂本	図像内容	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24		
	本文内容	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24		
	40巻本	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	33	34	34	35	36	37	38	39	40	40	21	22	23	24
	36巻本	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	卓	

×は『警世通言』以外

版本	順	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	40別
[兼善堂本]	順	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	40別
	「兼善堂」目次	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34王	35況	36	37	38	39福	40	40別
	本文内容	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34王	35況	36	37	38	39福	40	40別
	本文巻頭	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	34	36	37	38	35	40	40
某書肆刊本	倉石文庫本	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	34	36	37	38	35	40	40
	本文版心	25	26	27	28	29	30	31	32	33	35況	34王	36	37	38	39福	40	40
	図像内容	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	39,34	36	37	38	35	40	40
	図像版心	25	26	27	28	29	30	31	32	33	35況	39福	36	37	38	34王	40	40
某書肆刊本	本文内容	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34王	35況	36	37	38	39福	40	40
	本文巻頭	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	34	40	40
	本文版心	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	34	40	40
	図像内容	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34王	39福	36	37	38	35況	40	40
二刻増補本	図像版心	25	26	27	28	29	30	31	32	33	39,34	35	36	37	38	34	40	40
	本文内容	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34王	35況	36	37	38	39福	40	40
	本文巻頭	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	40
	本文版心	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	40
衍慶堂本	図像内容	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34王	35況	36	37	38	39福	40	40
	本文内容	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	40
	本文巻頭	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	40
	本文版心	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	40
某書肆刊本	図像内容	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34王	35況	36	37	38	39福	40	40
	本文内容	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	40
	本文巻頭	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	40
	本文版心	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34王	35況	36	37	38	39福	40	40
三柱堂本	図像版心	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	40
	目次	31	32	33	34	×	×	7	8	9	10	29	30	36	35	39	40	40
	本文	31	32	33	34	×	×	×	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明
	図像(兼)90図																	
某書肆刊本	24巻本																	
	本文内容																	
	図像内容																	
	本文内容																	
某書肆刊本	24巻本『諭世明言』																	
	本文内容																	
	図像内容																	
	本文内容																	
三柱堂本	24巻本『醒世恒言』																	
	本文内容																	
	図像内容																	
	本文内容																	
某書肆刊本	40巻本																	
	本文内容	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34王	35況	36	37	38	39福	40	40別
	図像内容	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34王	35況	36	37	38	39福	40	40別
	本文内容	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34王	35況	36	37	38	39福	40	40別
三柱堂本	36巻本																	
	本文内容	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34王	35況	36	37	38	39福	40	40別
	図像内容	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34王	35況	36	37	38	39福	40	40別
	本文内容	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34王	35況	36	37	38	39福	40	40別

×は『警世通言』以外

別表2 『警世通言』本文文字異同対照表（初稿）

巻次	目次題(本文題)	A 倉石文庫本 逵左文庫本 早稲田本	D 衍慶堂本 佐伯文庫本 三桂堂40巻本	E 葉行	C 三桂堂36巻本 香港古典文学 上海古籍1991	F 行慶堂24巻本 24巻本恒言 許真君旌陽宮斬蛟伝	G 明言	未調査		I 備考
								H 斜体字	大字	
第1巻	俞伯牙揮琴謝知音	4b8	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	俞伯牙是楚國大臣 伏義以知梧桐乃樹中之良材 將鍾寔□所居地名 老者老
		5b4	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	後游於涇池 楚王孫人才標致 久住何方
		10a1	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	當下治飯相疑 聞其前事 撥一名死囚來
第2巻	莊子休鼓盆成大道	13a2	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	解腰纏織帶 屋宇俱焚
		2b4	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	沒奈何何 士別三日 回下處修書
		7a2	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	拂塵 半[月+向]
		7a6	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	看經佞佛 又行了五百餘里 顏頰清秀
		7a7	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	即拜為著作郎 官裡 本店自有詩牌 上皇道
第3巻	王安石三難蘇學士	8b6	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	順昌八戰之後 鷓鴣大 有見
		10b10	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	大天鬼 有鬼
		13a2	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	拿玉龜前取問
		13b5	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	拿玉龜前取問
		1b1	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	早潮纜罷晚湖來
第4巻	柳相公飲恨半山堂	5b7	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	何他 日 ◎ ◎ ◎ ◎ ◎
		7b9	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	何他 日 ◎ ◎ ◎ ◎ ◎
		13b7,14a2	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	何他 日 ◎ ◎ ◎ ◎ ◎
第5巻	呂大郎還金完骨肉	14b2,15a2	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	何他 日 ◎ ◎ ◎ ◎ ◎
		16a3	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	何他 日 ◎ ◎ ◎ ◎ ◎
		7b10	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	何他 日 ◎ ◎ ◎ ◎ ◎
第6巻	俞仲舉題詩遇上皇	9a8	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	何他 日 ◎ ◎ ◎ ◎ ◎
		2ab	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	何他 日 ◎ ◎ ◎ ◎ ◎
		6b5	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	何他 日 ◎ ◎ ◎ ◎ ◎
第7巻	陳可常端陽應(山)化	6b6/7	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	何他 日 ◎ ◎ ◎ ◎ ◎
		12a9	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	何他 日 ◎ ◎ ◎ ◎ ◎
		19b7	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	何他 日 ◎ ◎ ◎ ◎ ◎
第8巻	崔待詔生死冤家	9b2	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	何他 日 ◎ ◎ ◎ ◎ ◎
		9b5	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	何他 日 ◎ ◎ ◎ ◎ ◎
		14b10	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	何他 日 ◎ ◎ ◎ ◎ ◎
第9巻	李謫仙醉草嚇蠶書	16a5	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	何他 日 ◎ ◎ ◎ ◎ ◎
		16a5	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	何他 日 ◎ ◎ ◎ ◎ ◎
第10巻	錢舍人題詩燕子樓	18a3	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	何他 日 ◎ ◎ ◎ ◎ ◎
		18a3	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	何他 日 ◎ ◎ ◎ ◎ ◎

別表3 『警世通言』眉批文字異同対照表

「兼善堂本」	葉/行	早稲田本	衍慶堂本	佐伯文庫本	眉 批
卷1	1 3a1	○	○	2b10	■太笑■幾箇」字是傳中筋節。
	2 4b1	○	○	○	凡以貴凌集賤不識好歹者，皆手下之流也。
	3 4b5	○	○	○	氣象何等從容，眼中已無伯牙矣。
	4 7a2	○	○	○	須着眼看伯牙徐徐入港處(処)。
	5 7a9	○	○	○	按地理志，伯牙臺在浙江嘉興府海鹽縣。臺側有聞琴橋，疑即與鍾子期鼓琴處(処)。小説大抵非實(實)錄，不過借事以見知音之難(難)耳。
	6 8b2	○	○	○	四字評得當。
	7 8b4	○	○	○	誰肯。
	8 8b10	○	○	○	始而慢，繼而疑，繼而敬，繼而愛，而終於相親不捨。古人交誼，真不可及。
	9 9b4	○	×	○	丈夫不說虛話。
	10 14a9	○	○	○	來看的主意就俗了。
	11 15b7	○	○	○	古人交情如此，真令末世富貴輕(輕)薄兒羞殺。
卷2	1 2b2	○	○	○	荒唐附會。
	2 3a1	○	×	○	分身隱形、出神變(變)化，都在道德經(經)中，人自參不透耳。
	3 3b6	○	○	○	大奇。
	4 4a7	○	○	○	莊生游戲。
	5 5a4	○	○	○	已甚之言。
	6 5b4	○	○	○	會說嘴的定有可疑。
	7 5b9	○	○	○	只這一句，跳動莊生机括。
	8 8a9	○	○	○	描寫此婦一腔慾火，可謂化工。
	9 9a9	○	○	○	欲加之罪，何患無詞。嗚呼豪傑之敗於讒口者，皆此類也。可憐可憐。
	10 10b9	○	○	○	大頑皮。
	11 11a2	○	○	○	來了。
卷3	1 1b7	○	○	×	說得透徹。
	2 3b6	○	○	○	果然輕薄。
	3 5a2	○	○	○	分疏明白。
	4 6b2	○	○	○	按此詩乃歐陽公所作以譏荊公者，小説家不過借以成書，原非坡仙實事也。
	5 8a4	○	○	○	戴紗帽的，慣說謊話。
	6 8a7	○	○	○	氣殺人。
	7 10b7	○	○	○	有意思人定有回心，决不任性(情)到底。
	8 12b1	○	×	○	文章悞事。
	9 15a5	○	×	○	氣殺人。
	10 16a5	○	○	×	氣殺人。
	11 17a1	○	○	○	氣殺人。
	12 17b8	○	○	○	此老畢竟處心還好。
卷4	1 3b1	○	×	○	也自難得。
	2 3b8	○	×	○	一是面相，一是貌相，俱有唯何也。
	3 4a10	○	○	○	為惡者可轉而之善。性執拗者必不轉，所以其惡更甚。
	4 ×	×	×	5a3	■作惡■是靠着齋醮一着。
	5 ×	×	×	6a3	■是心虛。

	6	7a6	×	×	○	一次了。
	7	8a4	○	×	○	二次了。
	8	8b1	○	×	○	三次了。
	9	9b6	×	○	○	四次了。
	10	10b2	○	○	○	五次了。
	11	11a7	○	○	○	六次了。
	12	11b3	○	○	○	奉上虐下四字，說盡末世有司病痛。
	13	12a1	○	○	○	牧民者以無事為福，即此一節可知。
	14	12b1	○	×	○	快心快心。
	15	12b6	○	×	○	更妙。
	16	13a7	○	×	○	七次了。
	17	14a5	○	○	○	甯音祝。
	18	14b7	○	×	○	此等人言難道亦不足惜乎。
	19	×	×	×	15a5	八次了。
	20	×	×	×	16b3	可悔恐不在此。
	21	17a2	○	○	○	萬口罵猶未足以自罵結局。
	22	17b3	○	×	○	用違其才，真是可惜。
卷5	1	3a2	○	×	○	薄福小人。
	2	4a7	○	○	○	惡甚。
	3	5b4	○	○	○	天理昭然。
	4	×	×	×	7b8	難得。
	5	8a6	○	×	○	此商亦是達者。
	6	10b4	○	○	○	更見陳朝奉非俗品。
	7	13a3	○	○	○	天使其然。
	8	15a8	○	○	○	関目甚緊。
卷6	1	2a3	○	○	○	全不為長卿之才。
	2	2b4	欠	○	○	春兒通竅。
	3	3a9	○	×	○	相如早為文君決策矣。
	4	5a7	○	×	○	卓王孫自是正理。
	5	6a2	○	○	○	卓王孫不如太史敷強項。
	6	6a5	○	○	○	沒人荐舉時去看，更好。
	7	8b7	○	○	○	初時肯看覷的，也就有一半古道了。
	8	9a2	○	○	○	且說如今長篇短卷何處搪酒喫。
	9	10b5	○	○	○	說得甚通理，其如不信何。
	10	10b8	○	○	○	無聊光景。
	11	12a9	○	×	○	汚粉壁的真可恨。
	12	12b3	○	○	○	大丈夫直想在酒樓上顯名，可憐虫。
	13	13a6	○	○	○	到底自惜一死。
	14	14a7	○	○	○	虧他還說。
	15	14b8	○	○	○	可憐。
	16	15b5	○	○	○	罷官後遂至依僧糊口，其廉可知。監司誣以脏罪，豈不誠冤。
	17	18a8	○	○	○	孫婆忠厚人。
	18	20b7	○	×	○	亦是機(机)会湊巧。
	19	20b9	○	×	○	孝宗所以為孝。
卷7	1	3a6	○			命之理微，多有八字同而貧富貴賤不同者，相法亦然。
	2	4b6	○			和尚預內席已異，又使咏新荷，如是誨淫也。
	3	5a5	○			関目。

	4 6b4	○			有此一念，還是賢王。賴有此一念，不曾枉殺可常也。
	5 6b7	○			官府不細察理，不知枉了多少人。
	6 7a7	○			不肯認錯，正是大錯。富貴人作惡業，多坐此病。
	7 8a6	○			日久自明了。
	8 8b7	○			惡人偏口硬。
	9 10a1	○			有理有理，當初冤可常時，有何表記為証，何不問而輕信乎。
	10 10a9	○			一首辭世頌，收拾一回小說。
	11 11b1	○			印長老文理甚通。
	12 11b7	○			羅漢名亦佳。
卷8	1 2a8	○			此等閒話是宋元人勝過今人處。
	2 3b1	○			好詞料。
	3 3b5	○			來脈甚透迤。
	4 7b2	○			■節見崔寧小心。
	5 7b8	○			立志不終，崔寧性命斷送在此。
	6 9a6	○			來脈又透迤。
	7 10b1	○			郭力朴實，說也不妨，却不該許崔寧不說，這又不朴實處。
	8 11b1	○			今吳中賞人亦云喝賜，是古來遺語。
	9 12a4	○			崔寧又着了迷了。
	10 12a10	○			針綫甚密。
	11 14b9	○			又多嘴。
	12 15a3	○			眼目。
	13 16a2	○			郭立多事，自取其■。
	14 16b2	○			打得好結閒冤家的有樣。
卷9	1 2a10	○	○		此風久矣，可嘆可嘆。
	2 2b6	○	○		舊小說謂李白為賀家婢出得，此正之。
	3 4b3	○	○		草茅中埋沒了多少忠義有用之才。
	4 6a1	○	○		■甚打拙。
	5 6b2	○	○		高麗事詳見此。
	6 7a1	○	×		渤音博。
	7 7b3	○	○		好個愛才皇帝。
	8 8a2	○	○		恩寵極矣。惟其人足當之。
	9 9a9	○	○		好舖張。
	10 10a7	○	○		會說。
	11 12b5	○	○		真知遇。
	12 15a2	○	○		官銜甚新。
	13 17b1	○	○		游戲中源是造福，此才人作用之妙。
卷10	1 3b3	○			真節婦，難得難得。
	2 5a8	○			此乃常是，獨非取以議盼盼耳。
	3 6a10	○			可憐可憐。比公孫東閣廢為馬廐更慘。
	4 7a8	○			一片精誠，雖婦人不泯，況男子乎。
	5 7b10	○			誰人有此熱腸，我願■拜。
	6 8b5	○			生時雖比屋未嘗見面，死後肯輕見人耶。當是為知己出頭。
卷11	1 6a9	○	○		從來有此，可嘆可嘆。
	2 9a3	○	○		可惜一箇好官，不曾大任。
	3 10b8	○	○		大人家切真護短。
	4 11a5	○	○		如畫。
	5 11b9	○	○		要緊閉目。

	6	12b2	○	○	疑慮中多少冤枉。
	7	12b10	○	○	徐用堪坐忠義堂一把交椅。
	8	13b2	○	○	善人孤立，兇人多助，奈何。
	9	15a6	○	○	節節見徐用精細。
	10	16a5	○	○	徐能大有作用。
	11	16a8	○	○	不和睦的，強盜不如。
	12	16b7	○	○	精細。
	13	18a4	○	○	浣紗女又有配享。
	14	18a10	○	○	亦未勝。
	15	20b10	×	×	皇天真个有眼。
	16	24b1	○	○	情節好。
	17	26a4	○	○	■得可憐。
	18	28a2	○	○	如此閒事，何妨多管。
	19	28b10	○	○	■人。
	20	29a5	○	○	說得是。
	21	35a9	○	×	好會合。
	22	35b9	○	×	■好人何曾吃虧。
	23	37a4	○	○	兇人之性，有甚無悛。
	24	38b9	○	○	此轉情節更妙，又是忠厚之報，被株連結■，有何心也。
	25	39b5	○	○	情節毫無滲漏。
卷12	1	2a4	○	× (異版)	此承平日久之通弊。
	2	3a4	○	○	說話中听。
	3	4a4	○	○	不遇(過)慷慨丈夫枉對他盡言，自取慢耳。
	4	4b3	○	○	可憐。
	5	5a7	○	○	事大奇。
	6	6a6	○	○	此時調停得体，方見能吏手段。
	7	6b10	○	○	好人中有賊人，賊人中有好人，俗語盲歟本此。
	8	8b7	○	○	此嬪人大有見識，大有志節。
	9	9b2	○	○	最是。
	10	10a6	○	○	也說得是。
	11	10a9	○	○	料着了。
	12	10b7	○	○	窺牆窺瑣總不如此窺簾者，無心而得力。
	13	11b10	○	○	彼不行方便者，如何。
	14	12a2	×	○	慢歟不盲。
	15	×	×	12b	■至之人。
	16	13a4	○	○	都是大道理。
卷13	1	4a3	○	○	自是涉世惡語。
	2	4b5	○	○	婦人好出头的，定是可畏。
	3	6b5	○	○	描出一團婆子氣。
	4	7a7	○	○	好人多糊塗，押司之謂也。
	5	7b9	○	×	巧言。
	6	8a9	×	○	巧言。
	7	9a4	○	○	一現身。
	8	13a1	×	×	三現身。
	9	16a2	○	○	申冤只在此數句。
	10	16b5	○	×	說得明白。
	11	16b10	○	○	解得明白。

	12	×	×	×	17b9	為計好言。
卷14	1	5a2	○	○	○	香睡二字可作繡房軒名。
	2	×	×	×	7b1	關心者亂。
卷15	1	1b8	○	○	○	凡人又要喫，又要錢，所以不成仙。
	2	4a5	○	○	○	為富不仁的看樣。
	3	8a5	○	×	○	老成之見。
	4	13b4	○	○	○	展轉幾想，描畫如見。
	5	14a5	○	○	○	此回書原為破巫覡之感而作。
	6	15a3	○	○	○	晦氣的件件挑動了惡机括。
	7	×	×	×	17b8	捕盜尚然■，公堂威嚴之下，枉之何如，可念也。
	8	18b7	○	○	○	說得可憐。
	9	×	×	×	23a2	口氣酷■。
	10	27a4	○	○	○	好官。
卷16	1	4b9	○	○	○	不量力。
	2	5b7	○	○	○	帶挈了李主管。
	3	7b5	○	×	○	賢哉母氏。
	4	9b3	○	×	○	偏不記娘言。
	5	12a9	○	○	○	人無賢愚，無貴賤，有錢者居上耳。可嘆可嘆。
	6	13b2	○	○	×	(異版) 小夫人累人多矣，那得不死。
	7	14a4	○	×	×	(異版) 張勝理直氣壯。
卷17	1	2a8	○	○	○	已棄不應得食，天使懺悔耳。
	2	3b4	○	○	○	■形容。
	3	4b5	○	○	○	一路描寫人情曲似。
	4	6a4	○	○	○	吹毛求疵以逢迎上司，有骨氣者決不如此。
	5	7a8	○	○	○	凡落井下石者，皆墳樹之虫，小童之便一類耳。
	6	8b7	○	○	○	教官無怪其然。
	7	10a4	○	○	○	賢哉此老，何異淮陰縹母。
	8	11a1	○	○	○	亦算賢主人矣。
	9	11a10	○	○	○	恠他說不得。
	10	11b8	○	×	○	英雄失路，可憐可憐。
	11	13b2	○	×	○	婦人無才為德，豈其然乎。
	12	13b6	×	×	○	高人。
	13	14b9	×	×	○	是個硬漢。
卷18	1	1b3	×	×	○	論奇而確。
	2	3b10	×	×	○	說盡考察■■貪酷，■見之應怒。
	3	8b1	○	×	○	用一分就中得不穩了。
	4	9b8	○	○	○	避老得老，天所以警蒯公，又烏知天所以愛蒯公乎。
	5	11a1	○	○	○	一世報恩。
	6	12b1	○	○	○	二世報恩。
	7	14a1	○	×	○	報恩第三世。
	8	14b5	○	○	○	大有感慨。
卷19	1	×	×	×	2a1	凡戲無益。
	2	2b6	○	○	○	高力士好個幫閒。
	3	3a4	○	○	○	來歷逶迤。
	4	6a1	○	○	○	宋人小說凡說賞勞及使費，動是若干兩、若干貫，何其多也。蓋小說是進御者，恐啟官家裁省之端，是以務從廣大，觀者不可不知。

	5	7a2	○	○	○	衙內主意在此，小人之談，有所窺而進矣。
	6	8b5	○	○	○	好耍子。
	7	8b9	○	○	○	衙內儘胆大。
	8	13b2	○	○	○	知利害。
	9	14a2	○	○	○	打馬戲起于靖康年間，唐時未有。
	10	15b3	○	○	○	遠慮。
	11	16a6	○	○	○	宋時小說凡言道術，必托之羅(罗)真人。蓋附會(会)公遠之名也。
卷20	1	1b4	○	×	○	何不即時放之，却又携歸。
	2	2b1	○	×	○	金鰻投化。
	3	3b8	○	○	○	親見又何疑。
	4	4a3	○	○	○	又不須疑了。
	5	4a5	○	○	○	打又何益。
	6	4b3	○	×	×	打又何益。
	7	5a1	○	○	○	周三既得使贅之，亦是一策。其成親後改節，自是金鰻作禍，非人謀所及也。
	8	5b4	○	○	○	只合分他異居，奪之非策。
	9	6b3	○	○	○	爹娘也管不得許多，押番大多事。
	10	6b5	○	○	○	自取。
	11	7a3	○	○	○	言不可不慎。
	12	9a3	○	○	○	好貨。
	13	10a1	○	×	○	此事破綻。
	14	10a8	○	○	○	小官人喫了聰明的虧。
	15	10b1	○	○	○	一個死。
	16	10b2	○	○	○	狠哉此婦。
	17	10b9	○	○	○	險哉此婦。
	18	10b10	○	○	○	既欲逃即不殺佛郎可也。不殺而逃，李生必不敢追尋而大事定矣。愚哉此婦。
	19	12a1	○	○	○	評話的都以成敗論事。
	20	13a1	○	○	○	兩個死。
	21	13a3	○	○	○	三個死。
	22	13a4	○	○	○	金鰻冤已報矣。此後皆金鰻結局。
	23	13b5	○	×	○	公堂冤枉如此不少，仔細看。
	24	13b9	○	×	○	四個死。
	25	×	×	×	15a8	五個死。
	26	17a4	○	○	○	周三張彬即無金鰻因緣，其人自可死也。只枉却戚青耳。
	27	17a7	○	○	○	六個死。
	28	17a8	○	○	○	七個死。
	29	×	×	×	18a2	尋常之物不可輕害，況非常之人乎。
卷21	1	2a1	○	○	○	通達國體，非經生常談。
	2	5a7	○	○	○	庸人謂之閒事，英雄不啻切膚。
	3	7b4	○	×	○	誰肯。
	4	8a4	○	○	○	撇脫。
	5	8b4	○	○	○	景清要阻公子之行，只是怕那班強盜。
	6	8b9	○	×	○	大丈夫語。
	7	9a4	○	○	○	此亦為俗報設法，大丈夫何必爾。
	8	10a3	×	×	○	誰肯。
	9	11b6	○	×	○	京娘亦非庸女子。

	10	16b6	○	○	○	婆婆與趙景清一般見識。
	11	×	×	×	17a8	大好漢。
	12	18b8	○	×	○	便是王師氣象。
	13	19b5	○	○	○	有劈着處得最當。
	14	20a7	○	○	○	也是。
	15	20b4	○	×	○	■腸如鍊，可敬可敬。
	16	21a4	○	×	○	補前未話。
	17	24b3	○	×	○	滿眼俗腸惡口，自然着落好人不得。
	18	24b10	○	×	○	大英雄語。
	19	25a4	○	○	○	可憐。
卷22	1	5b6	○	×	○	光景逼真，情節亦緊湊。
	2	6a5	○	×	○	延陵掛劍之誼，不過是宜厥後之昌也。
	3	6b8	○	×	○	所以為因緣，所以成眷屬。
	4	8b9	○	×	○	說言近理，全靠耳硬心明。
	5	15b3	○	○	○	此老僧亦必前生法侶，然觀金身羅漢投胎，則宋金前世已非凡僧矣。
	6	16b2	○	○	○	前生原從陝西來，今生暗合，亦是夙因。
	7	18a2	○	○	○	不蓄婢妾者，不忍負宜春也。惟平日識宜春之心，所以終不負之。
	8	24a5	○	○	○	移接還話，有趣。
	9	25b8	○	○	○	語有次第。
	10	26b7	○	○	○	宜春第一之人。
	11	27a9	○	○	○	金剛經結束亦好。
卷23	1	3a5	○	×	○	大有王者氣度。
	2	×	×	×	7b6	可入情史。
	3	×	×	×	8a3	情更深。
	4	11a3	○	○	○	此番甚難為情。
	5	11b6	○	○	○	一對多情種，非得潮神撮合，且為情死矣。
	6	12a5	○	○	○	潮王廟裡夢中人。
	7	13b8	○	○	○	全是潮王弄奇。
卷24	1	1b8	○		○	使王定可托，則三子不必留矣。若不可托，彼又安能鈐制三叔使不胡行耶。
	2	2b4	○		○	王定惹事。
	3	3a6	○		○	酒保生事。
	4	4a4	○		○	王定真小器，相反令小主無顏。
	5	5b6	○		○	妙着。
	6	6b8	○		○	此第一日燥脾。
	7	8a1	○		○	玉姐勸正自難得，然玉姐所以死守王生者，止念其不歸之情耳。
	8	8a6	○		○	此最良策，恨其晚也。
	9	9b2	○		○	可憐。
	10	9b4	○		○	盤纏小事，還是不放心。
	11	13b10	○		×	小不得此迴文。
	12	14a6	○		○	無聊之極。
	13	14a8	○		○	開[關]聖有靈，遣金哥來也。
	14	14a10	○		○	此敗子遺■碑。
	15	14b5	○		○	情節好。
	16	15a3	○		○	學乖了，如今纔省得。

	17	17a9	○	○	好誓願。
	18	19b4	○	○	說得輕便。
	19	20b5	○	○	路費足矣，要首飾器皿何用。
	20	21b3	○	○	主意想得着。
	21	23a3	○	○	眾人會處，事做得公正。
	22	25a10	○	○	開談好。
	23	26a8	○	○	有許多幫襯手，不愁不收留矣。
	24	27a9	○	○	絕妙一出戲文，比鄭元和傳更近人情。
	25	29a4	○	○	心猿意馬終無了日，敗子回頭便作家，只要狠下一鞭。
	26	32b10	○	×	真義夫。
	27	33a7	○	○	勢利起于家庭，家法壞于富貴。
	28	34a8	○	○	沈洪亦自可憐，是西廂記中鄭恆也。
	29	34b4	○	○	翠紅可傳一秤金衣鉢。
	30	35a9	○	○	若真正會讀書人，還不消讀到孟子。
	31	36b4	○	○	其情越不見越熱，此非鴛鴦所知。
	32	36b9	○	○	此景可厭。
	33	39a5	○	○	語識。
	34	40a6	○	○	都是實事。
	35	41a6	○	○	說得像。
	36	47a5	○	○	說話好個因頭。
	37	48b9	○	×	虧得分付此數句，不然又礙知縣面皮矣。
	38	50a9	○	○	前敘王婆牽頭甚略，却於此補出。
	39	51a4	○	○	斷得妥。
卷25	1	3b5	○	○	見在功德，勝如修殿。
	2	3b9	○	○	施公疑非吳人。
	3	4b7	○	○	賢婦。
	4	6a4	○	×	前生結下丈母緣了。
	5	7a9	○	×	最誤事。
	6	7b9	○	×	近似有理，是故惡夫長舌者。
	7	8a5	○	×	若日後果能報德，未為不是。
	8	8b1	○	○	亦是大有心人，堪作財主。
	9	8b10	○	×	文近理。
	10	9b10	○	×	又近理。
	11	10b4	○	○	小人逞目前，君子信天理。
	12	11b4	○	×	以君子之心，度小人之腹。
	13	12b9	○	×	描寫嬌態如畫。
	14	14a1	○	○	一邊步步逼近，一邊步步推開。
	15	15a7	○	○	雖是惡談，却也說得有感慨。
	16	15b2	○	○	扶持的也只如此。
	17	16b4	○	○	前子勸其母，今母又勸其子，都只為求人之難，可怜可怜。
	18	17b1	○	○	反坐入罪。
	19	18a4	○	○	此轉更妙。
	20	20b10	○	○	斷得公道。
	21	23a1	○	○	是你待施還何如。
	22	24b9	○	○	說得是。
	23	25a5	○	○	夢中已受追花報矣。
	24	27b8	○	○	情景好。

	25	29a5	○	○	○	當初桂曾以此待施。
卷26	1	1b5	○	○	○	其實取富貴只消時交。
	2	1b10	○	○	○	還是良心公道。
	3	2a7	○	○	○	英雄無聊下稍也。
	4	2b10	○	○	○	具眼。
	5	5a4	○	○	○	預作地步。
	6	6a8	○	○	○	不掩人善，眞賢公子。
	7	7b3	○	○	○	正中其計。
	8	9b4	○	○	○	具眼。
	9	×	×	×	13b2	■諛。
卷27	1	2a7	○	○	○	人情好諛，故以諛入。
	2	3b6	○	×	○	會說法。
	3	4a9	×	×	○	會說。
	4	×	×	×	6a7	會說。
卷28	1	4a9	○		×	禍本。 <small>(削除)</small>
	2	4b3	○		○	偏是老實人，着魔便深。
	3	5a5	○		○	伴脚跟。
	4	5b6	○		○	冷話趣。
	5	6a5	○		○	捱身入港，自取煩惱，凡多情多累，豈必白娘子哉。
	6	7b10	○		○	又拖一脚，情節委婉。
	7	16a6	○		○	故意反說，使人不疑。
	8	22a1	○		○	好箇李募事。
	9	23a9	○		×	女扯淡。
	10	23b1	○		○	趙主管可與交矣。
	11	26b10	○		×	女色能為人破慳，所以可貴。
	12	27b4	○		○	何必露相。不露相，可并收李員外。豈妖怪亦守貞節耶。
	13	×	×		28b2	話卻不差。
	14	×	×		28b4	這性大有志氣。
	15	29a9	○		○	都說得是。
	16	30a6	○		○	黃?片?腔。
	17	34a4	○		○	看郗后事，焉知此白蟒非美婦變來，何定蟒變美婦也。
	18	38a7	○		○	難得。
	19	38a9	○		○	難中尚照顧青青，白娘子眞仁義之妖也。
卷29	1	1a10	○		○	是亦一道。
	2	2a4	○		○	亭名亦好。
	3	3a5	○		×	登徒子非好色者，此眞好色也。 <small>(削除)</small>
	4	3b8	○		○	此女大有心人。
	5	5a4	○		○	畢竟理長，非腐也。
	6	5b6	○		○	眞有心人也。
	7	6a1	○		○	尼亦非孟■者。
	8	9a8	○		○	鶯鶯跳牆，翻案甚奇。
	9	10b6	○		○	男子不如嬪人，其張浩李鶯乎。
	10	11a5	○		○	坐父母一欸不是。
	11	12a1	○		○	坐浩一欸不是。
	12	12a10	○		○	好官府。
卷30	1	3a1	○		○	情靈一至此。
	2	3a8	○		○	好醫生。

	3	5b2	○	○	道學語用得着。
	4	6b6	○	○	人不可以有任?。
	5	11a6	○	○	有此順從直得一死。
	6	13b4	○	○	不枉叫做多情女兒。
卷31	1	11a7	○	○	其志猶可取。
	2	13b7	○	○	如画一出絕妙戲文。
	3	14b6	○	○	春兒有用之才，不枉做奶奶。
卷32	1	3b9	○	○	就是沒志氣的朽東西。
	2	4a7	○	○	也恁不得媽兒。
	3	×	×	5a6	■■精細。
	4	5b5	○	○	窮之以見德。
	5	5b7	○	○	果然僥倖成事，後來活計如何，亦是不終日之計。李甲蠢物，不知十娘何以眷之。
	6	6a10	○	○	不出媽兒所料。
	7	×	×	6b8	■是常理。
	8	×	×	7a7	十娘不能■情，李生只取他一■■心耳。
	9	×	×	8b6	蔣生大有■人，可敬。
	10	11a1	○	○	此等計議，在院中該早定，何待今日。
	11	11a6	○	○	亦妥帖。
	12	13a1	○	○	尚非開懷之時，宜其不永。
	13	13a8	○	○	都不老成。
	14	14a10	○	○	施君美一隻曲，高學(孝)士兩句詩，斷(斷)送了杜十娘一生，可恨可恨。
	15	15a7	○	○	机事不密，摠由不老成之故。
	16	16a1	○	○	小人說來，偏近道理。
	17	16b8	○	○	若非私意，竟是忠告。
	18	17a7	○	○	刺心。
	19	17b6	○	○	又下說詞。
	20	19b6	○	○	若真心不捨，十娘必更有說。
卷33	1	3b6	○	○	禍本。
	2	4b7	○	○	有此美意，何不搬回做一家。
	3	5b2	○	○	周氏合當推向大娘家去。
	4	6a7	○	○	真聖賢決不做自了漢，高氏自倚貞潔何用。
	5	6b1	○	○	慾火近乾柴，即使不着火亦非體矣。
	6	7b7	○	○	疑人忽用。
	7	7b8	○	○	遲了。
	8	8a7	○	○	老臉皮。
	9	×	×	8b7	何苦定要■此照管。
	10	9a2	○	○	此時該打發小二去。
	11	9a9	○	○	既疑小二，又重托他，何也。
	12	9b7	○	○	此時逐了小二還是下策，欲殺之是無策矣。此惜女之過。
	13	13b4	○	○	和姦罪不至死，所以董小二仍算枉殺。
	14	14a8	○	○	何以知其打死，只為私情事，眾所共聞故。
	15	14b5	○	○	高氏一生受了剛愎自用之過。
	16	17a6	○	○	四人豈無首從，好糊塗官府。
	17	17b9	○	○	喬俊何罪乃沒其家私耶。
	18	20a9	○	○	少此項，報應不得。

卷34	1	2b9	○	○	○	白日能見形者，借男子之精氣也。
	2	4b2	○	○	○	此禍胎也。
	3	7a9	○	○	○	鸞心久已有生矣。
	4	9a2	○	○	○	為結末遞長恨歌張本。
	5	10b5	○	○	○	要討便宜，便是糊塗之本。
	6	10b8	○	○	○	文官難說不愛奉承。
	7	11b3	○	○	○	生儘多賊智，亦乘王翁之愚耳。
	8	13a6	○	○	○	輕咒者必慢神。
	9	14b1	○	○	○	未能為子，豈能為夫。
	10	15a1	○	○	○	嬌鸞志氣不減齊姜，惜周公子之非晉公子也。
	11	×	×	×	20a9	怨極，然不得不怨矣。
	12	21a3	○	○	○	孫九可取。
	13	21a5	○	○	○	絕似南■乞救不得，哭回睢陽光景。
	14	23a9	○	○	○	遺而痛。
	15	24a10	○	○	○	亦由不忍目沒其才情，非但欲周章廷之惡也。
卷35	1	4b6	○		○	若非支助之奸，則邵氏貞婦也，得貴亦良僕也。小人之害可畏矣。
	2	×	×		5b1	可狠，可狠。
	3	6a8	○		○	君子所以遠損友也。
	5	6b1	○		○	可恨。
	6	×	×		14b1	邵氏冤魂所為，然不遇察吏不斷也。
	卷36	1	3b4	○		○
2		4a5	○		○	有胆識。
3		4a6	○		○	是。
4		6b7	○		○	有心，假也要假得像，不似今人假得全不像。
5		7a5	○		○	迎賓館談是說非者皆假也，不信者幾人哉。
6		7a9	○		○	行李人從都不見了，却問他告劄文憑，豈不可笑。往時長洲地方呈稱河內，有無頭死屍。縣令某問屍有傷否。事頗類此。
7		7b6	○		○	也難他不倒。
8		7b8	○		○	不着。
9		8a10	○		○	世間多少男子漢，誰肯擔出良心救人，不如此六七歲孩兒遠矣。
10		9b9	○		○	小廝也知恩報恩，世上負心人視此可愧。
11		10a2	○		○	此是以為九子母也。
12		12b7	○		○	一假而母不認子，妻不失夫，僕不辨主，假之為害如此。
卷37	1	2b5	○		欠	是个財主，算法不漏水滴。
	2	3a1	○		欠	人而不仁，疾之已甚。
	3	3b9	○		欠	說得道理。
	4	4a9	○		○	鐵僧初意甚善，原非必不可用之人。
	5	6b9	×		○	不見機。
	6	7b8	○		○	萬秀娘忍小恥而報大仇，是大有作用女子。
	7	9b1	○		○	離了莊更不可知矣，苗忠說差了。
	8	11b3	○		○	賊盜中有君子，君子中有賊盜。
	9	12b10	○		○	賢哉母。
	10	13a10	○		○	烈性男子。
	11	14b7	○		○	窮寇莫追。
	12	15a10	○		○	秀娘大有急智。
	13	17a3	○		○	秀娘步步精細。

	14	17b2	○	○	■起。	
	15	19上b	○	○	第一義。	
卷38	1	1b7	○	×	○	天下何事不為賂所敗。
	2	2a8	○	×	○	情語。
	3	2b9	○	×	○	天下又何事不為忿所敗。
	4	3a6	○	○	○	可憐。
	5	3a8	○	○	○	趙象畢竟終身不安。
	6	3b3	○	○	○	提綱語。
	7	3b5	○	○	○	此回書於街坊婦人俚鄙之態，摹寫曲盡，亦能手也。
	8	4b10	○	○	○	條命。
	9	5b7	○	○	○	老夫得女妻者，可視為鑒。
	10	5b9	○	○	○	兩條命
	11	8a2	○	×	○	■■氣象■不着。
	12	9a4	○	○	○	好事多磨，惡事亦不容易做。
	13	10b4	○	○	○	欲取固與不為還席。
	14	11a6	○	○	○	詞俱當行。
	15	13a2	○	○	○	如畫。
	16	13a7	○	○	○	李二郎索命，理之當然，阿巧何為來哉。
	17	13a10	○	○	○	好漢。
卷39	1	9a4	○	○	○	■先生也■低。
	2	13a5	○	×	○	刘本道以仙吏謫為貧儒，故鶴鹿羣之而不駭，其與之驚劫者惟綠毛龜耳。
卷40	1	4b2	○	○	○	銅符鉄券乃修煉文書。
	2	7a4	○	○	○	行文酷似西遊。
	3	11b8	○	○	×	天上無懵懂仙人。
	4	20a1	○	×	○	相地不相人，此地之所以多不驗也。
	5	22a6	○	×	○	今日愈思仙吏矣。
	6	23b8	○	○	×	鹿音賄。
	7	33b3	○	○	×	一次斬蛟。
	8	35a1	○	○	○	計斬二子。
	9	36b2	○	×	○	凡女色皆炭婦也，被染者自不覺耳。
	10	38b4	○	○	×	想頭玄甚。
	11	41b10	○	○	×	計斬三子。
	12	46b1	○	○	○	鋪叙富麗，亦是小說家能品。
	13	49a2	○	○	×	四次斬蛟。
	14	49b10	○	○	×	計斬四子。
	15	51a9	○	○	×	五次斬蛟。
	16	54a8	○	○	○	長者為行，不使人疑，何不明告之。
	17	56b9	○	○	○	六子一孫俱平。
	18	×	×	×	62a10	又好個賢父。
	19	63a9	○	○	○	功亦可准，■與之約而鎮之，如三蛟故事可也。意者如七擒孟獲，服其心而後釋乎。
	20	66a1	○	○	×	五次收孽龍。
	21	66b4	○	○	○	教人杜患■密。
	22	69b6	○	○	×	六次收孽龍。
	23	72b6	○	○	×	七次收孽龍。
	24	75b4	○	○	○	五解之中，璞為兵解，亦名金遁。

	25	78a7	○	○	○	名言。 故事亦雅。
	26	×	×	×	80a8	
卷40 別	1				1a9	名言。
	2				4b6	若只取分内者, 猶可■■■。
	3				5a1	■■■■■■■■■■願■節者誰哉。
	4				6b6	舉世葫蘆提豈特術■。
	5				9a4	夫人具李■■■腸打秋風之路■絕。
	6				9b1	■■■■■■■■■搜出民脂盡夫。
	7				9b7	■■■反此■擬入神。

数字及び○は眉批の全部または一部、あるいは痕跡が存在することを、×は痕跡すらないことを、■は文字が判読不能であることを意味する。

衍慶堂24卷本明言

24卷本恒言

許真君旌陽宮斬蛟伝

《警世通言》版本新考

大塚秀高

提要：本稿是对《警世通言》的原刻本、“兼善堂本”、早稻田本、衍庆堂本、佐伯文库本和三桂堂本所做之新考。《警世通言》的原刻本早已失传。至今为止所认为的最早的版本是“兼善堂本”，它是在对原刻后印本的本文进行重刻的基础上，对绘图（包括画工的署名在内）也进行了覆刻的一种版本。早稻田本是对“兼善堂本”的版木进行了挖改的后修本。衍庆堂本（《二刻增补警世通言》及24卷本）是对早稻田本的版木再次进行了挖改的后修本。佐伯文库本是绘图对原刻本进行了覆刻，本文用原刻本的版木，又对其中破烂不堪的部分进行了新刻的版本。其中的第40卷由原刻本的“旌阳宫铁树镇妖”被换为“叶法师符石镇妖”，而原刻本的“旌阳宫铁树镇妖”在明末崇祯年间以后被挪用到了《三教偶拈》中，改题为“许真君旗(旌)阳宫斩蛟传”。三桂堂本是以佐伯文库本的本文为依据，并以简笔字又进行了新刻的版本。它对收录的作品进行了调整，省略了本文的眉批，同时对一部分绘图也做了修正。

关键词：警世通言、原刻本、兼善堂、衍庆堂、三桂堂、三教偶拈